

してゐる様に見え、この間隙を克服せんが爲にわれわれの全力を以てしても無益に見える困難である。それにも拘らず此の Hiatus を理性、悟性、想像力、信仰、感情、迷想、或は萬策盡きては愚劣を以てさへ克服せんとするわれわれの永遠の努力が續く。」とゲーテは『考慮と忍従』の中で述べてゐる。此の克服し難い Hiatus を克服せんとする『永遠の精進』の道程に現れ来る所産は『この生活である。而して此の精進と共に Ite (廣く思想的動きも含む) は益々高進してその純粹の度を加へ、遂に經驗が Idee の純眞直次なる表現として許さるる迄に進む。茲に現れ来る直觀の對境をゲーテは純粹現象 (Keine Phänomene) と呼んでゐる。

以上、ゲーテの意味する純粹直觀から彼の Idee の本質を覗つたわれわれは最後に此の純粹現象を觀察せねばならない。

ゲーテはその論文『經驗と科學』(一七九八)の中で現象を三つに分けてゐる。即ち一、經驗的現象、二、學的現象、三、純粹現象である。經驗的現象は自然に於て、何人も認知し得る一般的現象である。此の現象を實驗に由つて學的に整理し、『最初に認知されたと異なる事情と條件のもとに』記述して、そこから『經驗的法則』を構成し、他の未知なる諸現象を檢覈する際の準尺となるべき『或る程度』の『不變性』と『斷定』によつて配列さるる場合を學的現象と呼ぶ。此の學的現象に於て已に見られる現象整理に際しての心的活動が愈々深く鋭く現象に透徹して、ゲーテの所謂人の精神が最

も純粹に現象と照應した處に第三の純粹現象がある。『この現象は凡ての現象と凡ての試みとの結果として最後に立つ。それは決して孤立し得ずして現象の絶えざる連續のうちに示される。それを提示する爲に人間の精神は、經驗上動搖するものを決定し、偶在的なものを除去し、不純なるものを排除し、紛糾を解き進んで知られざるものを發見する。』一切の現象を貫いて存在すべき常恆なるものを求むる精神が、現象から現象へ一步一步足を踏みしめ、踏みしめて險坂を上へ上へと登つて行く有様がゲーテの學的態度に見られる。『無限を求むるものは有限を凡ゆる側面に於て探れ。』と教へた彼は、實に倦む事のない現象の觀察者である。一步一步現象裡に探り入る注意深い旅人である。經驗を直觀する事が深くなればなるだけ、經驗の根本的な現象が益々研ぎ澄まされて純粹經驗の前に現れて来る。而して彼の純粹現象或は Urphänomene に達すれば、それはもはや『言語乃至假定を通じて知性に表れ来るものではなくして直ちに現象を通じて直觀に示現する』ものである。それは『直ちに Idee に接して立つ根本現象』(ein Urphänomen, das unmittelbar an der Idee steht.) であり、『その直後に神明を見ると信ずる』根本現象である。此の經驗の最高峰に攀ちて、『神』即ち Idee の顯現に直面する者は、かのプラトンの理念の太陽を觀る者の如く、その燦然たる光輝に打たれて一種の畏怖と不安に襲はれねばならぬ。 Von den Urphänomenen, wenn sie unseren Sinnen enthüllt erscheinen, fühlen wir eine Art von Schen, bis zur Angst. 此の不安と畏怖はファウストが『母』なる言葉の

うちに感じた畏敬と驚異に相通するものである。ゲーテはエッケルマンに語つて『Urphänomenen が人を驚異せしめたならば、その人は満足して可なりである。』と云つて、尙言葉を續けて、『より高いものは彼には與へられない。彼はそれ以上をその背後に求めてはならない。』と云つて、茲に人間のなし得べき局限、人間に與へられ得べき最後のものの存在する事を教へる。此の現象の上に出でんとする者は、遂に空想裡に神祕の世界を描いて遂に経験の世界から離れねばならぬ。ゲーテが Urphänomenen の『背後』に見るといふ『神明』は決して直観の鏡の背後に、しかも尙、直観の對境として求めらるる様な意味の『背後』ではない。一切の對象の核心をなし、現象が現象として意識の前に現れ來らねばならぬ必然性或は第一條件を生み來る『無』は、現象としてその全相を示す事のない限りに於て現象の上に現れないと云はねばならぬけれども、而も現象の背後に、それと二元的存在を構成する或物ではない事は前にも已に述べた。ゲーテの思索は常に現象を離るる事がない。ハインロートが彼の思惟を gegenständig であるとなし、彼にあつては『直観即思惟、思惟即直観』と云つてゲーテの是認を得たのは、現象の上に Idee の相を感受する彼の直観能力の特異性を語るものである。かうした直観の高進純化した鏡の前に現れた純粹現象は一見、冥想的所産である様に思はれるけれども決して神秘主義者の逃げ込む第一原因ではなくして『われらの力の最後の標的』である。『認識し得ざるものの發見』とその表示なる第一條件の發見である。此の『唯一にして而も恆轉性』を有する現象

の第一條件は、無限の事情のもとに『永遠の反復』を示すものである。此の純粹現象は經驗にして、而も必ずしも萬人の心に現前する經驗でない。Idee を領有しない者は Idee の動きを見る事ができない。純粹直観の高峰に立たない者は純粹現象の光輝に接する事が不可能である。言葉を以て之を解説しても、その眞諦を傳へる事は困難である。一步一步足を踏みしめ、經驗の峰峰に登つた旅人のみ脚下に波打つ山山の展望を許す高峰に立ち得るのである。

Hier stehe nun still und wende die Blicke

Rückwärts, prüfe, vergleiche, und nimm vom Mund der Muse,

Dass du schauest, nicht schwärmst, die liebliche, volle Gewisheit.

旅人は經驗の極頂に立つて、顧みて初めて自然の統一的全體の相を知る。それは決して彼の空想ではなくして『豊かに、なつかしい確かさ』である。自分の行程には放漫なる『我』の勝手さが無い。自分は靜かに『觀つめて』來た。そこに自分の強みがある。天空は近く自分の頭上に懸つてゐる。自分の心は尙かの大空を慕うて止まない。けれども自然の研究者としての自分は茲に局限を知らねばならぬ。これ以上に進まんとすれば Metaphysik の領域に這入らねばならぬ。それは自然科学の闕をふみ越える事になる。けれども自分は自分の力の極限に達した様に思ふ、それはひとり自分の力の極限ではなしに人類の達し得る直観の最高頂であると信ずる。 Wenn ich mich beim Urphänomenen zuletzt

berühige, so ist es doch auch nur Resignation; aber es bleibt ein grosser Unterschied, ob ich mich an den Grenzen der Menschheit resigniere oder innerhalb einer hypothetischen Beschränktheit meines bornierten Individuums. ゲーテはかう云つて深い敬虔と同時に強い矜持の念を以て人類の局限の上に自己の辿つた路を眺めた。顧ると真理を求めて辿つて来た自己の路は何といふ寂しい路であつたらう。そこには脇目もふらずに辿り行く獰然たる一人の旅人を見出すに過ぎない。已に一七八四年に書いた『花崗岩に就て』なる感想のうちに真理を追求する者の寂しい運命を述べてゐる。『大地の最も深い肺腑のうちに搖ぐ事なく休らひ、その高い背を聳やかして、一切を圍む水脈さへ會つて到つた事のない峯』をなす此の岩石は『最も高く最も深いもの』である。その成立成分はよく知られてゐるが如何にしてそれが構成されたかは千古の秘密である。『最も若く、最も多様に、最も動搖變轉して極りない創造の一部なる人間の心』を抱いたゲーテは『真に情熱的な愛向を以て』此の『最も古く、最もしつかりした、最も深く肅然としてそそり立つ自然の兒』なる此の巨岩に不思議に心が惹かれた。ファウストが尋ね行く『母の國』には、

Göttinnen thronen hehr in Einsamkeit.

此の崇高な寂寞、それは die erhabene Ruhe, die jene einsame stumme Nähe der grossen, leise sprechen den Natur gewährt. である。ゲーテは、高く突兀として聳えてゐる花崗岩の頂に立つて此の崇高な

寂寞の感に浸される。一切の生命以前に一切の生命を超絶して地軸から九天の上まで聳えてゐる此の花崗岩の上に立つた利那、大地の内に動く不思議なる自然の力が、そのまま自分のうちに働きかけて來るのを感じられる。その時人間の胸の奥にひそむ『眞理感』が澄み渡つた噴泉の様に強く心の全面を浸して來る。その時ゲーテは思ふ So einsam, sage ich zu mir selber, indem ich diesen ganz nackten Gipfel hinabsche und kaum in der Ferne am Fusse ein geringwachsendes Moos erblicke, so einsam, sage ich, wird es dem Menschen zu Mute, der nur den ältesten, ersten, tiefsten Gefühlen der Wahrheit seine Seele eröffnen will. ファウストが『母の國』に於て感じた『寂寞』は正さしく此の『最も深い眞理の感情』にその心を開かんとする者の心にしみ出た感情であると解する。此の感情は、ゲーテの自然研究の道程に於て常に彼の運命を離れないものであつて、『自然』の道を獨り歩む彼の姿は餘りにも淋しいものであつた。『母の國』に尋ね入るファウストの姿の上にわれわれはゲーテ自らの心相を餘りに明瞭に眺めらるる心地がする。ゲーテは『フランス出征記』の中で此の心相を告白して『茲(自然)には師も友も見出さなかつた。凡てを自分でやつて行くより仕方がなかつた。』と云つてゐる。偶々『自然』の道に於て恵まれる發見をなしても、これに酬ゆる理解と共鳴が缺けてゐた。『予が此の仕事(自然の研究)に従事するに際して取つた眞摯なる熱情を何者も理解する事ができなかつた。何者も、如何に此の熱情が予の内奥から湧いて來たかを見なかつた。人人は此の賞讃に

値する努力を妄想に類した誤謬と考へたのである。『植物の變態』の研究でもゲーテには『これ程分り切つた思想であるにも拘らず』、固定概念に捉はれてゐる人人の頭には、此の生命成生の思想が理解されなかつた。光學の研究に關しても同様であつて『分析した光』にのみ慣れてゐる頭には『生きた光』をも『かの死せる假定に歸納せんとしたのである』。ゲーテを狂喜せしめた人間に於ける顎間骨の發見でも當時の學界は如何に冷淡と不理解を以て之を迎へたらう。『當時並びにその後の自分程孤獨な人間を人は想像する事はできまい。』といふ彼の告白の有する内容の深さは『母の場』に於て敘述さるる『寂寞』に詩的表現を得てゐるものと思ふ。

然らばゲーテが自然研究の道程に於て、登りつめた山頂の寂寞裡に恵まれた Urphänomen は如何なる相を呈するものであるか。それを觀察する事によつて『母』を圍んで行はれる『一切生體の形像』即ち Schemen の des ewigen Sinnes ewige Unterhaltung 即ち Gestaltung, Umgestaltung の内包的意味を知る事ができると思ふ。

ゲーテが『フランス出征記』に於て自己に酬いられない不理解を述べた時に、彼を最も不快にしたのは『凝定せる思考法』、『死せる假説』であつた。彼の企圖を理解できない原因は悉く此のうちに含まれてゐる。即ち彼の常に努力精進して止まない標的は生命の眞實相である。それは勿論人間の入る事を許されない神殿であるけれども、精進して息まない人間の目はその神殿を洩るる清明なる光に接

する事ができる。此の光が Urphänomen であつて、それは『現象の無限多様を貫いてこれに生命を與へる』『根本極性』(Urpolarität) の形として現れ来るものである。

われわれはゲーテの自然研究の大序とも見らるる『自然に關する斷篇』に已に此の思想の萌芽を見る事ができる。唯、此の頌詞に於ては學的記述よりは自然に對する直覺的觀察、主觀的表現が優れてゐる。けれども彼の内面的自然の旋律が外的自然研究のうちに放射し行く彼の自然研究、即ち主觀の内容が客觀化し、遂に純粹なる客觀界の形式に推移し行く道程の冒頭に現れる文獻として主客未分のファアーゼを示し、彼の自然研究の本質的態度を示すものとして興味がある。

ゲーテは此の中で已に自然を極性の上に感受してゐる。その『生兒に於てのみ生きる』『自然の母』が示す『不易なる法則』はいふ迄もなくその生兒間に行はるる法則即ち現象の上に見られる法則性である。而して自然が現象として現れ来るには必ず自己を分裂する。現象に見らるる法則は、此の分裂の上に現はれる。故に多様な自然の現象は、これを統合する唯一者の多様な現象である。その間に統一と聯絡の存在する事は常に忘れてはならない。『彼女は一切である。彼女は自分を賞罰し、自分を喜ばし且つ惱ます。彼女は粗野で柔軟、優しく而も恐ろしく無力にして全力である。』かうした擬人的表現に於て現はれる極性の法則は學的研究に進むにつれて愈々的確なる輪郭を得て来る。

此の斷篇が出てから約半世紀、一八二八年ミュンヘン宰相に宛てた手紙の中で再び此の文章に關する

追憶を述べ、『予は當時の理解の階梯を名づけて、未だ到達しない最上級への方向を發表する様に強ひられてゐる比較級とでも云ひ度い。』と云つてゐる。此の『最上級』への思想の發展は此の半世紀近くの間完成せられた學的事業に於て示されてゐる。ゲーテは此の學的事業の結論として、且つは『比較級』なる斷篇に『最上級』なる眼睛を點する爲に、當時未だ明確に現れてゐない『一切の自然の二つの偉大なる動輪』の思想を提起し、これに就て次の如く述べてゐる。それは『極性と高進の概念で、前者は吾人が自然を物質的に考へる限りに於ての物質の屬性であり、後者は、自然を心的に考へる限りに於てのその屬性である。前者は不斷の牽引と排推に於て、後者は不斷の高進に於て見られる。しかし物質は精神なしで存在活動し得ず、精神は物質なしに存在活動し得ないから物質も高進が可能であり、精神も牽引排推をやめる事がない。』ゲーテの學的事業は實に此の結論の實證である。『植物の變態』に於て植物の生成の法則として發見された *Ausdehnung* と *Zusammenziehung* の規則正しい交代、及びその際認知される *Verfeinerung* (*die Pflanze sich stufenweise feiner ausarbeitet*...) 即ち『高進』によつて、植物が『自然から課された點』に達し、その『永遠なる事業』を完成する爲に益々純化する。ゲーテは自己に就て *Die Systole und Diastole des menschlichen Geistes war mir, wie ein zweites Atmenholen, niemals getrennt, immer pulsierend.* と云つた言葉をその *メソテ* 直ちに植物の研究のメソテとなしたもので、その『指南針』(*Wegweiser*) によつて *Die Bildung und*

Umbildung organischer Naturen (母の場では *Gestaltung, Umgestaltung*) を追及すると『予に見逃されなかつたのは、自然が不斷に分解的手法、即ち生きた不可思議な全體からの發展を守り、更に全く無縁と見える諸關係が相互に接近し、一に接合せらるるといふ風にして、再び綜合的手法を行ふ様に思はれた事である。』と云つて自然の呼吸、脈搏を明にした。此の單純にして、しかも捉へるに困難なる『根本現象』は色彩學の研究に入ると共に絶えず繰返される。

茲で見られる『根本極性』はゲーテが *ein uranfänglicher ungeheurer Gegensatz* と云つてゐる『光と暗』の極性である。一切の色彩は此の兩極の基礎の上に成立する。而してその成立の *Medium* となるものは『濁』である。『現象の背後に何物をも探る勿れ、現象即原理であるが故に。』と云つて彼がわれわれに指し示した蒼蒼たる天空は、彼に取つては『色彩學の原理を啓示』してゐるものであつて、即ち『暗黒なる宇宙の空間を背景にして、*Medium* と見らるべき大氣の「濁」が日光に照される場合に青空が生ずる。太陽が或時は赤く、或時は黄に見えるのは「光」なる太陽を背景とする大氣の濃淡によるもので濃い時は赤色、淡い時は黄色を生ずる。』といふ。勿論、かうした彼の説は學識論の餘地もない程の定説ではないにしても、唯それに依つて、彼の『根本現象』に就ての思想が如何に徹底的にその思考法の本質をなしてゐるかを見る事ができるのである。

更に他の物理的現象に就ても同様である。ゲーテに取つては冷やかに横はる一個の鐵片も生命の秘

密を啓示する『不思議なる事物』である。その Gleichnütigkeit の相は決して死滅の無ではない。その有する磁氣の敏感性が如何に僅かの刺戟によつて兩極に分裂するかは何人も之を知つてゐる。『茲にわれわれは鐵といふ無關心物を知る。われわれはそのものに於て、分裂が起り、持續し、消散し、更に容易に起るのを見る。それはわれわれの考へでは、直接に Idee に接して立ち、自己の上に何等地上的のものを認めない「根本現象」である。』此の『無相』が分裂しては又抱合を求め、抱合してはどこともなく『無相』に歸つて行く。

電氣に於ても亦此の『根本現象』の不思議に接する。唯、茲では磁氣に於ける様な『無相』の仲介なる鐵片に相應するものが無い。Das Elektrische, als ein Gleichgültiges, kennen wir nicht. Es ist für uns ein Nichts ein Null, ein Nullpunkt, ein Gleichgültigkeitspunkt, der aber in allen erscheinenden Wesen liegt und zugleich der Quellpunkt ist, aus dem bei dem geringsten Anlass eine Doppelercheinung hervortritt, welche nur insofern erscheint, als sie wieder verschwindet. 實に此の『無』こそ『一切の現象』のうちにあつて現象をして現象たらしめる『源泉の楔點』である。此の『無』は『極少なる條件の變化』と共に『物體の上に極性を示現し來る』ものである。此の極性は『無』として『物體のうち眠つてゐる。』此の『眠』は生命の極度の『緊張』を思はせる靜であつて決して死滅の無相ではない事は已に純粹直觀の條に於て見た處である。ゲーテはこれを次の様な優れた言葉で述べてゐる。

2. Spannung ist der indifferent scheinende Zustand eines energischen Wesens in völliger Bereitschaft, sich zu manifestieren, zu differenzieren, zu polarisieren. 此の『無相』の直次なる表現こそ『純粹現象』であり、『自然の生命』の表現である。Dies ist die ewige Systole und Diastole, die ewige Synkrisis und Diakrisis, das Ein- und Ausatmen der Welt, in der wir leben, weben und sind.

ゲーテが五十年前に直觀的に自己のうちに感じた自然の『呼吸、脈搏』は五十年後の今にして確實なる眞實として彼の直觀の前に開かれて來た。主觀の事實が彼の忍耐深い自然の觀照によつて次第に客觀的眞實性を自然の法則の上に實證して來た。『自然頌』に於て『比較級』であつたものが茲に始めて『最上級』に達するのである。

けれども、彼の辿つた路は決して、豫定された、公道ではなかつた。萬人の已に通ら過ぎた路ではなかつた。裏から湧いて來るともする事のできない力に促がされて、一步一步切り開いて行つた自己の路であつた。前途は到る處唯『試み』と冒険の野であつた。そこには無益なる努力と散漫なる摸索が待ち構へてゐる危険なる領域である。ファウストが初め、『地の靈』に蹂みにじられ、幾度か死に現前しつつ遂に『眞理の野』なる『母の國』に入らんとした時、

Da fass' ein Herz, denn die Gefahr ist gross.

とメフィストが彼に警告したのは、生命の危険といふ單純なる意味でなく、眞理を求めて『路なき

國』に入らんとするものの必ず打克たねばならぬ危険を意味してゐる、ゲーテが自然研究に當つて常に自己を警めた『危険』の意味である。即ち客觀的材料の蒐集に偏倚するか、主觀的先入思想に陥落するかによつて『個個の現象を克服して』『母の國』なる『根本現象』にまで進み入る前に中途に滯澁し、安住する危険の謂である。此の危険はゲーテが植物研究に際して述べた次の言葉にも現れてゐる。『Metamorphose の思想は上智から受けた極めて公正な賚賜であるが同時に極めて危険なる賚賜である、それは無形式へ誘ひ、知を破り、分散する。それは、もし反對重力が許されなかつたなら遠心力と同様に無限へ亡失する。反對重力即ち、細記本能、つまり、一旦現實に現れたものを頑強に執持する本能、その深い根柢に於ては皮相的なる何物も動かし得ない求心力をいふのである。』此の『極めて危険なる』道を辿つて遂に『無涯の地』にヘレナを認知し得たファウストの歡びは、『根本現象』に生命の真相を捉へたゲーテの歡びであつたに相違ない。ゲーテが宰相ミュレルに宛てた手紙で『茲に完了する最上級をかの比較級と比較して微笑を禁ずる事ができず、五十年一貫の精進を歡ぶ。』と書いた心は、ファウストが人生を『望ましきもの』と讚美した歡びに照應すべきものである。

六

『總概案』に述べられてゐるやうに、『ファウスト』の第一部は *Streit zwischen Form und Formlosen* の表現である。『形なきもの』とは『未だ形式を成さざる内容』である。眞の形式は内容の自らなる顯現であらねばならぬ。内容と分つ事のできる形式は内容と縁なき形骸である。ワグネルの求むる如き『技術』は『他人のご馳走のごつた煮』である。流動して止まない感情が自らなる眞實の形式を生み行く陣痛の惱みを傳へてゐるものが『ファウスト』第一部の藝術である。それは *Gehalt bringt Form mit. Form ist nie ohne Gehalt* であるからである。他の言葉で言へば、遠心的欲求と求心的欲求の争闘の過程であり、自己認識の光の次第に勝り行く道程である。此の争闘の極頂に於て遂に内容から古典的形式が生み出されんとして、自己の本質をなす *Idee* が目まぐるしいばかりの光を以て迫つて來る處に『母の場』がある。ファウストの永遠のノスタルジアは彼を驅つて、此處に至らしめずにはおかない必然的運命であつた。彼の求めて止まない永遠の生命の源泉、愛の靈池なる『永遠の女性』はヘレナの姿として茲にその明るい形容を示して來る。ヘレナの姿は已に第一部の『魔女の厨』に見られる。ファウストは魔の鏡のうちに、刹那にして消え行くヘレナの姿を捕へんとする。

かくして、凡ゆる女性のうちにヘレナの姿を求めんとするファウストの悲劇が始る。そして、形式と内容、求心と遠心の二つのたましひの争闘が極頂に達した時、『母の國』にファウストは初めてメファイストから解放された独自の自己を見る。換言すれば、そこには初めて批判の自我と作爲の自我が一個の純粹自我に統一せらるるのである。そして自己の求めて息まないものの真相を認識する。『表現すべからざるもの』、『記述すべからざるもの』の眞實相がはつきりと彼の眼底に彫りつけられる。會つて、まぼろしの姿として現れたヘレナは始めて明白な現實の相を取つて現前する。

Die Wohlgesalt, die mich vorerst entzückte,

In Zauberspiegelung beglückte,

War nur ein Schaumbild solcher Schöne! —

Du bist's, der ich die Regung aller Kraft,

Den Inbegriff der Leidenschaft,

Die Neigung, Lieb', Anbetung, Wahnsinn zolle.

『汝こそ正さしく』わが生命の全部、愛の全部を捧げても悔いない『そのもの』であつた。茲に初めて半意識的に求め來つたものが、その全相を意識の上に現し來る。そこから一切の作爲に『永遠の意味』が生れ、一切の作爲が『永遠の意味』に貫かるるに到る。

此の『永遠の意味』はゲーテが伊太利の旅に於て、発見した *Idée* の詩的表現である。彼が久しくあこがれて志を果さなかつた『われらの心の故郷なる伊太利』のふところに抱かれ、澄み切つた大空の下に、眩しい日光にひたりながら、誤つて暗い北歐に生み落されたかのようなゲーテは『生れて初めて眞に幸福を感じたのである』(ヘルデルへの手紙)。彼の明るく醒めた眼の前には、南歐の『自然』のうちに動く『生命の相』が一切の被衣を脱いで躍り出た。『*Idée* をまのあたりに見た。』とシルレルに告げたのも決して自然の固執する一片の弄言ではない。而して藝術に於ても初めて古典藝術のたましひが明白になつたのである。即ちヘレニズムの美の生命を體現するヘレナの姿が、ファウスト||ゲーテの心眼に、恰もかの *Urpflanze* 或は *Urtier* と均しく現れて來たのである。

『母の國』なる *Dreifuss* は茲から容易に説明される事と思ふ。ヘレナの姿は、此の『燃ゆる鼎』に彼の手にせる『輝く鍵』を以て觸れると共にその煙の中から生れ出づべきものである。此の『根源的眞理感』の鍵が外界の自然或は藝術に觸れて自己を實證し、畢に『感情』が『認識』に高進する處に世界と精神の完全にして確實なる諧調が生れ、そこから *Idée* の啓示が行はれる事は前に見た處である。今、此の『鍵』が美の *Urphänomen* なるヘレナを生み來るべく、それに照應する對境としての鼎は、いふ迄もなく古典藝術の生命を象徴せねばならぬ。アポロの座なるデルフィに於て古代の人の崇敬の中心を形成して、神に仕へる *Pythia* がその上に坐して地殻の空隙から立ち上る煙のうち

にアポロの神託を聞いたといふ *Dreifuss* は、ギリシヤ精神の粹を鍾めてゐる象徴として茲に意味されてゐると見られ得べき理由を充分に具へてゐる。

『輝く鍵』が一度古典藝術の生命の核心なる『燃ゆる鼎』に觸れて、ヘレナの姿をまのあたりに見得たファウストは、人生に於て始めて確實なる意義を発見し得たのであるが、已に述べた様に *Idee* の示現は、自然に於てであれ、藝術に於てであれ、餘りにも *Nüchtern* であつて、水に畫ける姿にも似て捉へ難く消え易い。けれども、かく幻の如く速かに消えたにしても一度ファウストの生命の核心に焼き著いたヘレナの姿は、以前にも増して彼の欣求の標的となる。 *Wer sie erkennt, der darf sie nicht entbehren.* といふファウストの告白は最も雄辯にその消息を語るものである事は先に述べた處である。

われわれは、此の *Idee* の示現を愛慕して精進をやめない人間の心を藝術として取扱つた『ファウスト』全篇の意義をそこから説明して見度いと思ふ。

已に見た様に *Idee* は『記述し得べからざるもの』、『表現し得ざるもの』である以上、これを表現せんとする努力は永遠に充されざる努力である。しかも此の *Idee* は既設の目標ではなくして内部なる生命の泉であるが故に、自から創造的の *Tat* となつてほとぼしり出づる運命的力である。従つてかくして生み出された創造は生命の全相を竭してはをらないにしても、常に *Idee* なる母の面影を偲

ばしむる『自然の生兒』である。生命に躍る生兒の群である。各生兒はそのまゝ母の全相ではないにしても、全體たらんとして動いて止まない生命を示すものである。此の相をゲーテは『象徴』と名づける。 *Die Symbolik verwandelt die Erscheinung in Idee, die Idee in ein Bild und so, dass die Idee im Bild immer unendlich wirksam und unerreichbar bleibt und, selbst in allen Sprachen ausgesprochen, doch unaussprechlich bleibe.* と『象徴』の意味を説明する。『表現し得ざるもの』の表現は當然此の意味の象徴として表れて來なければならない。『表現せられざるもの』が、『表現』のうちに捉はれて、しかも同時にその拮拘を克服して自由の天地へ出ようとする勢を語る處にゲーテの象徴の意義がある。或る概念が或る表現比係に『言ひ竭され』た場合、即ち比係と概念の飽滿をゲーテはアレゴリーと呼んで明白に象徴と區別してゐる。故に象徴とアレゴリーの重大なる差は、第一は『表現し得ざるもの』の認識の如何にある。次に此の認識が表現となるに際して、單に或る不可見、不可知なるものの記號として表現のうち存在するばかりではなくして象徴自らの内に自らを破壊して飛躍せんとする或物がなければならぬ。即ち不斷に生長して止まない生命の本質の部分的表現に於て全體への指示を見る處に象徴の特質がある。此の二つの特質は、ゲーテの事業を貫いて獨り藝術的創作のみならず、その學的業績並びに廣くその生活態度の上にもまで表れてゐる。*Idee* の顯現を本質とする生活過程に於て當然の歸趨であらねばならぬ。 *Alles ist nur symbolisch zu nehmen, und überall steckt*

noch etwas anders dahinter. Jede Lösung des Problems ist ein neues Problem. と云つて此の『或もの』は常に割切れずに残される。而して一切の表現の努力は此の『或もの』に肉迫せんとする點に集中するが故に象徴が高進すればする程、多様な場合を代表する性質が強くなり、同時にその特殊性が増大し来る。何となれば、生命の眞實相を示現する程度が鋭い丈け益々他の何ものを以てしても置き換へ難い独自の地位を確定するからである。Das ist wahre Symbolik, wo das Besondere das Allgemeine repräsentiert, nicht als Traum und Schatten, sondern als lebendig- Augenblickliche Offenbarung des Unerforschlichen. 特殊にして同時に普遍であり、しかも決して浪漫主義的夢幻の象徴ではなくして、近づく難い Idee の奕奕たる刹那の啓示である。故にゲーテが『自然頌』に於て Sie (Natur) setzt alle Augenblicke zum längsten Lauf an und ist alle Augenblicke am Ziel. と云ひ、 Vergangenheit und Zukunft kennt sie nicht. Gegenwart ist ihr Ewigkeit. といふ意味の刹那である。最も眞實なる現在に過去と未來を自然のうちに含んで而も常に現在の刹那に確實なる歩を保つてゐる底のものであるべきである。時間の上に表現さるる象徴は、かくして永遠の過去が永遠の未來に飛躍せんとする刹那の啓示である。これを空間の上に考へらるる象徴としては部分が部分としてその特殊性を保有すると共に全體たらん事を暗示する部分であらねばならぬ。かかる部分は『自己のうちに無限を含む部分』である。ファウストがヘレナの幕で、ヘレナを生めるアルカディアの自然を讚美して、そこに見

らるる神人交感の世界を稱へて、

Ein jeder ist an seinem Platz unsterblich:

Sie sind zufrieden und gesund.

と云ひ、各個人が現在のあるがままの姿に安住して、しかも不滅であり得る事を述べてゐる。

Denn wo Natur im reinen Kreise waltet,

Ergreifen alle Welten sich.

即ち各個性の世界がそのまま他の一切の世界と抱合し、『母の場』に述べられた如くに einsam にして同時に gesellig なる個性の世界が出現される。此の『純粹なる力』の表現に於ては、飽くまで現象に即した個性の世界が、そのまま『一切の世界』を包含する象徴の世界を示すものである。ゲーテの『ファウスト』はかうしたゲーテ自身の抱懐する象徴の意味を最も純に具現してゐる象徴詩である。Jedes (Wort) zeigt von der Bemühung des Menschengeistes, etwas Unbegreifliches zu begreifen. といふ風に、精進のたましひが一語一語のうちに漲つて、無限の生長を一語一語の連続の上に示してゐる。かうして始めて『全くしかも常に未完』といふ矛盾の不思議が眞に生きて來るのである。

繰返していふ、『ファウスト』はゲーテの全生活の象徴的表現である。而してその第一部は心的生活が純化して Idee の明白なる認識に高進して行く道程の告白としての象徴的意義を有するものであ

り、母の暮なる轉機以後に於ては Idee の明白なる認識からその表現の努力へ移つて行くのである。茲に告白としての自らなる象徴的所産たる第一部が意識的創造的象徴になつて行く。かうして六十年の間ゲーテと運命を共にし來つた『ファウスト』が幾度か躓きながらもその精進の最後に、

Gerettet ist das edle Glied

Der Geisterwelt vom Bösen;

„Wer immer strebend sich bemüht,

Den können wir erlösen.“

といふ天上の『愛』の讃歌に來迎せられて、内部よりの必然的精進が、やがて自ら『永遠の女性』の『愛』に攝取せられて行く宗教的救済の眞實を示し、プロメーテイスとガニメートが相抱擁して Idee の『無相』へ還つて行く。

一八三一年八月即ちゲーテが此の世に於ける最後の誕生日の前に此の劇詩を完成せんと期して遂にその志を果し得た時詩人の心は幸福に輝いた。彼の文机の上にも『七重の封印のもとに』二卷の *Fiobände* としてその原稿が横はつてゐる。『今や予が餘生はほんとうの贈物と見てよいのだ。此の上仕事をしようとするは或は何をしようとする全く無關心だ。』とエツケルマンに語つたゲーテの言葉には、爲すべき事を最早爲して了つて、地上の生活を去るべき日の近い事を豫言する響がある。而も、彼の全生

涯とファウストの辿つた全程とは共に死と共に終結するものではなかつた。『永遠の女性』は彼の魂を無限に牽いて息まない。ゲーテは此の高き象徴的意義に於ける『未完成品』を彼が地上に残すテストメントとして、

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis;

Das Unzulängliche,

Hier wird's Ereignis;

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

と結ぶ。

第二部、第二幕以下の有する象徴的意義の檢査は更に獨立した研究に於て試みなければならぬ。

フ
ア
ウ
ス
ト
頌

—その救済問題を中心として—

ファウストはもう百歳になつてゐた。愈々彼の最後の日は近づく。「おれは世の中をひたむきに駆け抜けて来た。歡樂といふ歡樂は一つ残さず髪をひつ攫んで離さず、意に満たぬものはつつ放し、わが手を脱れたものは強ひても追はず：そんな風に一生を力一杯突貫して来た。」そして最後に勝ち得たものは廣大なる領地と壯麗なる邸宅である。世界の二つのエレメントが永劫の昔から不斷にその鬭争を罷めない大洋の岸邊に、人間の力は海を遠くに追ひのけ、豊かなる大地はファウストの意圖のままに創り出されてゐる。創造と文化のよろこび、そこに理想の國家社會を建設して、人類の樂園をわが力のもとに生まうとすることがファウストの最後の満足であつたのだ。「おれは幾百萬のものに土地を拓いてやらう。安全とまでは行かぬにしても、自由に活動の生活を得させる爲に。耕地は縁を布いて豊饒に、人畜は直ちに、新しき大地の上に、大膽不撓なる民の築いた丘に據つて快適なる居を構へるのだ。外には潮が海の縁まで狂ひ追つても、内は樂土である。海の潮が烈しく土地を蝕み取らうと迫れば、國民は力を合せてその穴を填めようと急ぐのだ。さうだ、おれの服膺してゐる精神はここにある。それは叡智の最後のものだ。曰く、自由と生活は、日日これを贏ち得てこそ、享有の資格があるといふものだ。即ちその國では、危険に取巻かれつつ、小供も大人も年寄も、まめやかな年を送るのだ。おれは、かうした群集を見、自由なる國民と共に自由なる國土の上に住み度い。かかる

瞬間が招来すれば、おれはそれに向つて呼びかけよう「暫し停れ、かくも汝は美しければ」と。おれの地上の日の足跡は永劫に互つて滅びる筈がない……」ファウストは來るべきかうした刹那の豫感に充ちて感激に溢れる。此の感激の瞬間が同時に彼の最後の瞬間であつたのだ。何となれば幾十年か前にメフィストと取り交した契約の言葉を彼は不用意にも今口にしたからである。勿論事實は契約の條項に當つてゐるのではなかつた。契約の際にファウストが惡魔に與へた言葉は、「おれがもし氣樂になつて安樂椅子の上に延びる様になつたら、おれの身上もおしまひだ。おれを甘い言葉で騙して、自惚の心を起させ、おれを快樂で賺すことがお前にできたら、それがおれの最後の日だ。さあ賭をしよう……おれが或る瞬間に、暫し停れかくも汝は美しければ、と言つたならばお前はおれに繩をかけてもよい。おれは甘んじて亡びよう……」となつてゐる。然るに今のファウストは現實の快樂に満ち足りてこの言葉を口にしたものではなく、夢に描いた未來の刹那に叫ぶだらうことを假定したに過ぎなかつた。けれども幾十年來、あらゆる手段を講じて、その狡智の限りを盡してファウストをわが思ふ壺に導かうとしたメフィストには、それが直説法であるか、假定法であるかの語法上の見境もつかない。それ程に惡魔は狼狽して居り、稍々老耄のけはひがある。一切事に停頓することを知らず、「世の中を駆け抜けて來た」ファウストには、メフィストも全くへとへとに弱らされてゐた。何故彼は、傳説「ファウスト本」に出て來る惡魔の様に最初からその契約に期限を附けなかつたらう。その上、

傳説書の惡魔は二十四年といふファウストへの奉仕の年期を十二年にごまかして、晝十二年夜十二年併せて廿四年などと値切り倒した程のしれ者であつたのだ。そして死に度くないと腕くファウストの頸をひねり曲げて地獄に蹴落した惡魔である。ゲーテのメフィストはそれに比べると、いかにも間の抜けた惡魔である。あたかもファウスト自身が間の抜けた正直男であると同様であり、彼の伴侶として最もふさはしい者であつた。

ともあれ詭辯の天才メフィストはファウストの口から洩れたこの契約の言葉を聞き脱がさなかつた。メフィストが此の言葉を捕へたことの是非は法學者間に論議の種を蒔いたのであるが、しかしファウストはその言葉を最後として地上の生活を終つたことは事實である。それがメフィストとの契約に拘束せられた結果であつたか、乃至は彼の肉體の生命がその有機的活動の終焉に至つた自然死であつたかは不明であるにしても、メフィストが完全に勝利者たり得なかつた事實から考へ合せるならば、此の度も亦此の道化役者は、自ら知らずしてその役割を了せた「騙られたか、たり」となつたのである。彼がファウストの「たましひ」をわがものになし得たと自負したのも東の間、ファウスト來迎の天使の群に押しつけられ、彼等がファウストの「不滅なるもの」を天上に持ち歸るを、指を喰へて見るより外になす處を知らない無能の惡魔になり下つたのである。この事はまさしく彼の契約が畢にファウストに於て現實になり得なかつたことを物語つてゐるものではあるまいか。このことは更

に、メフィストがその生涯の伴侶としてファウストに随伴したにも拘らず、遂にファウストの「不滅なるもの」を理解することができなかつたことを示すものである。メフィストは自己の理解し得ざるものを領有しようとの野望を抱いたものである。彼が一敗地に塗れたことも亦當然でなければならぬ。それをわれらは已に「天上の序言」に於て知り得る。天成の道化役者メフィストは神の前に罷り出でてファウストのたましひを賭物に神と輸贏を決することを求める。素より神はこの「しもべ」を相手に契約を結ぶ者ではないが、「彼(ファウスト)が地上に生くる限り、それも亦禁せられてない。」とファウストに對するメフィストの自由が許される。しかし神はファウストの本質並びにその向ふ處を充分に知つてゐる。「たとひ今、彼のわれに奉仕する處混沌迷なりとも、やがてはわれ彼を明澄の地に導くべし。幼樹緑を吐けば、花と實がやがてその未來を飾ることは園丁のよく知る處ならずや。」¹⁾「よき人はその混沌の衝動裡にあつても、正しき道を亡失することがない。」神の目からはファウストは實に此の「よき人」であつた。而して神が彼をその「明澄の地」に導かん爲に選んだ手段は實に神の下僕なるメフィストに外ならない。「人間の活動は餘りに容易に遅緩する。彼はちきに止め度のない安息をよろこぶ。それ故にわれは彼に伴侶をつかはし、彼を刺戟活動せしめ、悪魔としての役を行はしめるのだ。」²⁾即ち悪魔も亦神よりつかはされたものであつた。素より悪魔自體は神の對者を以て自負する限りこれを知る由もなく、後にファウストに向つて「常に惡を欲して善を行ふ力の一部」など

と自畫自讚するが、そのことを直ちに神に屬するものとしての自覺と取る必要はない。ファウストはメフィストを以て地靈よりつかはされた靈として考へてゐるが、元來「神の生命の天衣を織る」地靈は、神のはたらきの自然界に現れる側面を象徴具現するものである限り、「天上の序言」とファウストの觀察とは矛盾するものではない。更にファウストとメフィストとの契約を考へる場合、神がメフィストに對して説明したファウストの本質が、此の度はファウスト自からの口を通して聞かれるのである。即ちファウストのいふ處は、不斷に「高き精進にある」人間が曾つて惡魔によつて理解せられ得るとも思はれないが、わがこの不斷の精進、努力、絶えず新しきものを求めて停頓することを知らぬたましひの欲求を満し得るならば、やつて見るがよいのだ。素よりわがたましひの運命が如何なる終末を取るかは、自らも知る處でないにしても、躍進して止むことを知らないその生命の動向は、その對境の一切に於て究竟の眞實を求めて止まない。青天の上に限りになき飛翔を求むる此のこころを捉へて、地べたに泥を喰はせることができるならばやつて見るがよいのだ。神はファウストのたましひを以て「綠吐く幼樹」に比した。此の幼樹は不斷に生成してやむことを知らない。ファウスト自らこの消息をメフィストに告げるのである。ファウストが神の愛兒であることは「天上の序言」に於て先づわれらに告知せられると共に、その愛兒が如何なる本質のものであるかも亦メフィストに對するファウストの態度に於て知ることができるのである。

悪魔をその伴侶とするフアウストが同時に神の愛兒であるといふ事實は一見甚だしく矛盾であるかにも考へられる。實際フアウストの自覺的事實としては、彼が神の愛兒であることは全く考へられてをらず、反つて、彼の側から神への反逆兒であることは猶ゲーテの取扱つてゐるプロメーテイスのユピテル神に關する關係に均しいものである。而も神のフアウストに對する態度に於ては、恰もゲーテのプロメーテイス劇斷篇に見られる様に、限りなき寛容を以てその反逆に臨み、却つて反逆を以て神の懷に廻入すべき道程と見てゐる。それは不可思議の事實である。フアウストに於ける救済の問題が種種に論せられることも此の不可思議なる事實を中心としてである。

「天上の序言」に於てメフィストがフアウストを稱して、「酸酵が彼を遠くに驅立てる」と云つてゐる様に、フアウストの出發は實に彼の内的生活の革命的轉換から始まる。彼は一切の權威を否定し、一切の學智と教權から離脱して唯純眞の自我に立ち歸り、人生の旅をその第一歩から始めようとする。それはドクトル・フアウストの如きものに取つては實に容易ならざる事件である。彼の生活の根柢は恰もその書齋を象徴するが如くに、古今を貫く深遠該博なる學智の上に据ゑられ、大學教授として學生の尊敬を一身に集めてゐる當代の鴻儒である。彼の自我は多様な粉飾を以て幾重にもおしつつまれた榮譽の人である。彼は此の粉飾から一擧にして自我を解放し、一切の繫縛を足下に踏躡つて立ち上るのである。彼の革命は渺たる一個の人間のうちにに行はれたものではあつたけれども、その

決意と勇斷は誠にピートンの龍をふまへて立つアポロの姿にも似通ふものがある。而して彼の求むる處は、「世界をその深奥に於て統合するもの」をわれ自らの眼を以て見、自らの體驗裡に把握せんとするにある。前人の眼を通して眺められた知の世界は、色眼鏡を通して映る世界に過ぎない。多様な色彩の領有を誇る生活に停頓することは、もはやフアウストの堪へ得る處ではなかつた。此の斷乎たる勇斷は、その求むる對象に就て言へば、幾重の封印におし包まれた眞實即ち生きたる神をその一切の封印から解放して、そのあるがままの相に於て觀んとする欲求に外ならない。うちに自己を解放せんとすることは、外に神を解放せんとすることである。かかる意味に於て、眞實の神を見んと欲する者は觀念の神に甘んずることを得ずして體驗と創造のはたらきのうちに、即ち「行」のうちに神のあゆみを歩むまでに押進むのである。フアウストがミクロコスモスの標章に接して感じた感激は、やがて來らんとする自己の生活の象徴としての豫感である。けれども豫感はまだ彼を創造的「行」の軌道に乗せたのではない。彼が此の豫感の上に立つて早くも「神に均しき」誇りにふくれ上つたことは、未だ學智の薰習を離脱し得ざることを示すものである。地靈の冷罵「汝は汝の主觀裡の靈に似たらんもわれには未だ遠し」の一句に一蹴し去られ、彼の「超人」の誇りは先づ第一の折伏を體驗する。若しフアウストが地靈の警策を眞向から受けて、「蛆蟲」の様に縮み上ることを知らなかつたならば、やうやく學匠の屍室から脱却し得ても、「超人」の驕慢に落在して自ら無間地獄に墮つ

べき穴を掘つたであらう。幸にも彼のたましひは緑鮮かなる「若木」であつた。彼はうちなるそのよきたましひに導かれつつ、次第に體驗の世界に人生の旅の歩みを運ぶのである。

フアウストの精進の道程は、人生と自然のあらゆる側面に互つて眞實追究の眞剣なる戦ひに終始してゐる。彼のたましひは此の意味に於て神を求むる旅であることは彼の革命宣言の第一聲のうちに已に見た處である。然るに彼の意識我が神を問題とする機會を持つ毎に多くは神への反撥を以て宗教の問題を乗越えて行く。地靈の折伏によつて「神に均しき」超人の誇りから轉落し、「我」の消滅のうちに毒杯を手にした時、響き互る復活祭の鐘の音と歌の聲に、若き日の思ひ出に誘はれて、再び生命へのあこがれを経験するが、しかし今のフアウストは「おれには信仰がない」ことを同時に告白する。此の告白は、復活祭の日の散策に際して、フアウストがまだ若かりし日、その父と共に鍊金術の秘薬によつて人民の疫病を癒やしたことに對する彼等の感謝を受けた時に洩した言葉「救ひを教へ、救ひを贈り賜ふ天にゐます神にお禮を申すがよい」といふ挨拶と共に、一般人民の信仰が如何に自己の求むる神と異なるものであるかを示すものであつて、フアウスト自らが神に關心を持たないことを意味するものではない。彼がその日の夕べ、沈みゆく夕陽を追うて、無限のかなたにそのあこがれの翼を延ばして、心ゆくまでに自然の美しさにわがたましひを高揚せしめた後、夜孤燈のもとに獨坐し、胸のうちなる「粗暴なる欲望も鎮まり」、「人への愛と神への愛が動き始めた」時に、彼の宗教的衝動

は福音書ヨハネ傳の翻譯の試みに動いて行く。彼の此の翻譯の試みは最もよく、フアウストが彼獨自の宗教を求むる者であることを語る。彼の試みは單に「太初にロゴスありき」といふそのロゴスの一語に致されたに過ぎないものであるが、しかも、彼が聖書のうちに自己の生きたる宗教的生命を吹込むことによつて、自己の神への感入を味はうとする態度が現れるのである。彼の信仰告白の最もポジティブに表明せられてゐる箇處は、グレートヘンとの宗教問答の場面である。

グレートヘンの決意は、彼女の愛の高まると共に、その愛する者のたましひを信仰的に救済しなければ止まない眞剣味を帯びて来る。彼女の愛の完成はフアウストのたましひの救済にかけられてゐることは彼女の意識すると否とに拘らず彼女の全身的なる欲求であつた。彼女の此の眞剣な態度に對して、フアウストはその宗教觀を部分的ではあるにしても洩さざるを得なかつた。「何人が神の名を呼ぶを許されよう。何人が、おれは神を信ずると告白し得よう。又何人がさう感じて、おれは神を信じないと敢へて云ふものがあらう。萬象の包攝者、萬象の支持者、彼はおんみをもわれをも彼自らをも支持してゐはしないか。天は蒼蒼として高く、地は搖ぎなく横つてゐるではないか。そして永遠の星は親しげなるまなざしもて昇つて来るではないか。自分がおんみと眼と眼を見合つてゐると、凡てのものがおんみの頭へ胸へ迫つて来て、永遠の謎となつて、見える様に見えない様におんみのそばに動くではないか。おんみの心がどんなに大きくとも、それで一杯に充たすがよい。そしておんみがその

感情のうちに完全に幸福になれば、もうその気持ちをどう呼んでもよろしいのだ。幸福とも、心情とも、愛とも、神とも呼ぶがよい。わしはそれに對して名稱を知らない。感情が一切だ。名稱などは天上の炎をつつむ響だ、霞だ。」この「天上の炎」こそは神の姿である。それがわれらのうちにあつては「聖に燃ゆる心」となり、自然のうちに現れては「なべての静かなる泉のほとり、なべての花咲く樹蔭に」感せられる「愛のぬくもり」である。神の存在は一切の生命のうちに見られ、一切處にはたつきとして現れてゐる。これを天上の片隅に押込め、人間の姿に象つて空想することはファウストの神觀のなし得ない處である。故にファウストが神に就て冒瀆的な言葉を吐く箇處はすべて偶像化せられた神に就て述べてゐるものである。例へば契約の場で「あの世はおれの合意しない處だ」とか、ファウストがその生涯の最後に近づいて、「憂」との問答に於て「あの世はわれらの展望が遮られてゐる。目をばちくりさせながら天上を仰ぎ、雲の上に自分と同じ形のことを捏造する奴は馬鹿だ。」などいふ烈しい言葉は頌詩「プロメーティス」に於てプロメーティスがツオイスに投げる嘲罵と均しい心の現れであつて、天上に乃至は「あの世」に鎮座する如き人格神はファウストに對して何の權威もない偶像に均しいものであつたのである。但しこれを以て直ちにファウストの無神論を云謂すべきではなく、反つて、彼の汎神論的實踐のうちに彼の宗教的精神の熾烈なる熱情を見ることが出来る。唯彼は神に就て徒らに論議することを好まない丈けである。若きゲーテが、人は神を論議するが、神

は黙黙として行ふものである旨を述べてゐる心も、晩年のゲーテが「人人は理解を越え思議し難い最高の存在が恰も彼等の同輩であるかの如くに取扱つてゐる。でなければ人人はおん神とか、神様とか、善良なる神とかいふ筈はない。神は彼等に取つて、わけても神を日口にする僧侶に取つて一つの空言となり、單なる名稱となつてゐる。彼等はそれを口にする際何も考へてゐない。しかし神の偉大さをしみじみと感じたならば、口がきけず、畏敬の爲めにその名を呼ぶことを欲しないだらう」と云つてゐる言葉も悉くファウストのグレートヘンに對する言葉と同一根幹から發してゐるものである。常に「天上の炎」にその心が充たされ、わがうちに神の力が嚴かに君臨することを感ずる者は、自然や人間の心に燃上る神の炎に觸れて必然的に自己も亦共に燃え上る。神の認識はかくしてのみ行はれる。神は信ずる對象のみではなく、觀照の對象でもあることをゲーテが強調したことは、此の神の共感的認識の事實を云つてゐるものと考へ度い。而して神の認識は人間の心に於て二つの傾向を取つて行はれる。一つは上述の如き汎神論的共感的認識であり、他は罪惡感から發する神の認識である。兩者とも一切處に遍滿する愛の力としての神の認識に於て同一根柢に立つものであるが、後者に於ては特に救済の要請者としての自我の上に集注せられる愛として感受せられ、たましひの寄托者として絶對歸依の對象たる關係に於て生命の血縁に結ばれるのである。前者はすべてのものの上に光被する日輪の如きそれであるならば、後者は個の上に焦點をおいて集められたその光照である。宗教

が此の關係に於て個の上に、成立する時にのみ救済が可能である。前者の關係が必ずしも宗教的關係ではないとは云はない。たましひの成長と歸趨がかかる認識によつて決定せられることはいふ迄もない。唯人間が罪惡深重の自覺に悩み、それによつて一切の「我念」が自らのうちに否定せられる時に、求められたる神の光は何等さへぎらるる處なくゆたかにもその個體のうちに流れ込んで、個體の内部に滲透する。所謂機の深信によつて驕慢の我念が崩壊する時、絶對者が個の主體として主宰するに至る。茲に救済が完成する。その際絶對者は必ずしも宗教的形式のうちに現れる權威者たるを要しない。フアウストが神は「幸福、心情、愛」その他一切の相に於て現れ得ると云つてゐる如くに、純眞にして絶對的なる愛は個體の思はざる相を以て表れ来るものである。

フアウストにあつてはグレートヘンの愛を知る以前は、神への認識は第一の關係に於てのみ現れてゐたに過ぎない。自己のうちに醗酵する創造的衝動の旺盛はフアウストをして自から「我」即「神」の推論を行はしめたものであり、「神の等像」としての自己感情は巨人フアウストに最もふさはしいものであつたけれども、「人間フアウスト」の成長と完成は自己を絶對者と等位に置くことによつて中斷せられねばならない。此の超人思想は地靈の折伏に始まつて人生へのフアウストの旅の進路に於て次第に是正せられて行く。フアウストの人生行路は謂はば巨大なる大理石の素材から次第に人間像が彫り上がつて行く過程である。超人的素材が「人」にまで洗鍊彫琢せられて行く過程ともいはれ得よ

う。而して彼を人として最も純化せしめたのは實にグレートヘンとの戀愛であつた。彼は此の愛の體驗によつて初めて罪惡を知つた。純眞素朴なる少女は彼によつて母となりやがて彼の示唆によつて彼女は母を死に導き、彼女の兄はフアウストの手にかかつて非業の最後をとげ、彼女自らは嬰兒殺しの罪を犯して獄屋につながれ、狂氣のままに處刑せられるのである。これら一切の犯罪の連鎖は唯一人フアウストの肩に卷かるべきものである。彼はその主犯者として極刑に値するものであり、宗教的には正さしく地獄に墮つべき極道非人であるべきである。然るに彼のみ一人その生命を全うして脱れ去るのである。それ丈の事件の推移を以てすればフアウストは惡魔以外の何ものでもあり得ない。あたかも彼はその超人主義を惡に於て實踐的に徹底せしめたかの觀がある。しかし事實は此の犯罪によつて彼の「我慢」は徹底的に打ち拉がれた。純眞で偽ることも知らないフアウストは勿論メフィストの要意したワルブルギスの夜の惡魔の歡樂に由つてその威能を麻痺せしめることはできなかつた。彼はその生命を賭しても愛人を牢獄から救ひ出さんと決意したのであるが、グレートヘンは最早生ける屍であり、彼女のたましひは神の攝取に信賴して安息の地を確證して居り、彼女及びその一家を亡ぼしたフアウストに對しては神の如く寛容を以てその罪の一切を許してゐることは、たとひ常識的な言葉を以てしなかつたにしても、雲間を洩るる月光の如くに、彼女の濁れる意識の間から洩れ来るたましひの表現によつて知られるのである。罪は汚辱である。けれども罪の前に頭を垂れるたまし

ひの爲には罪は反つてたましひの汚辱を拂拭する役割を演ずるものである。ファウストは愛する者の悲劇的最後に直面して完全に打拉がれた。そしてグレートヘンの愛をその全振幅に於て痛感したのである。十字架上のキリストを仰いだ使徒の心が、その刹那を轉期として眞實の意味に於て神につく強盛なるたましひに轉位した如くに、ファウストも亦グレートヘンの死に直面することによつて、その學匠骨が完全に打碎かれ、彼女の聖なる愛によつて宗教的救済の體驗に徹した。このことは「ファウスト」第二部の終りに於てファウストのたましひの昇天を來迎するものがグレートヘンのたましひであることによつて讀み取られるであらう。

誠にグレートヘンの死は、ファウストの爲には十字架上のキリストの死以外のなものでもない。そこから受けた彼のたましひの悲痛は殆んどその肉體の堪へ得られる限度を越えたものである。このことをわれらは第二部の冒頭に於て知り得る。彼がグレートヘンの悲劇から甦る爲にはレーテの泉と人間以上の愛のはぐくみが必要としなければならなかつた。第一部のファウストは一度死して、「彼の心をその體驗せる恐怖より清め」、「レーテの流れの雫のうちに彼を溶みせしむる」天使のかしづきによつて、彼の「痙攣に硬直せる五體は柔らぎ」、「聖なる光に」再び蘇返つて來るのである。復活のファウストの姿、それは第二部のファウストを豫想せしむるものであるが、如何に第一部發端のファウストと異なつてゐるだらう。超人ファウストとして神との等位を要請した彼は、今や眞理の太陽にま

ともに向ふに堪へない人間限界の自覺者として、その反映のうちに生のすがたを見ることに満足せんとする自己局限の人となつてゐることを暗示する。かくて學匠として發足したファウストは茲に人生の行人として復活し來るを見る。しかしながら彼が如何なる對境に向ふ場合に於ても、不斷に常恆なる唯一の態度は誠實にして全人的であり、精進して止むことを知らないといふ心構へである。彼は『大地を見る』の人である。その一步一步を踏みしめ踏みしめ自らの生を進む。彼は迷ふ。「人間は精進しつづつある限り迷ふ。」これが神の言葉である。しかし、たとひ如何に迷ふもファウストの全人的熱情の道は常に天上に迄通じる。彼に於てこそ煩惱即菩提である。さればこそ彼のたましひを來迎する天使のことばは『不斷に精進努力する者をこそわれらは救はめ。』と響くのである。メフィストはかかるたましひに對しては單にその精進の刺戟としてのみ役立つに過ぎないものであることがファウストに於て實證せられた。彼の精進は個の眞實に徹せんとする欲求から發して、理想的共存社會の建設に終つてゐる。彼の最後のことは『おれの地上の日の足跡は永劫に互つて滅びる筈がない。』この力強きことばは今やファウストの徒らなる放言ではなくして、精進して息むなき生涯をその背後にせる者の唇をおのづから洩れ來れる自明の告白である。ゲーテがその晩年に『永生のわが確信は活動の概念から發する。何となれば、若し予が最後まで小止みなく活動するならば、現在の生存形式がわが精神に堪へ得なくなつた暁、自然は予に異なる存在形式を與へる義務があるからだ。』といふ言葉に通

ふものがあり、ファウストの告白は即ちゲーテ自らの體驗的事實である。而して此の永遠の生命の確證は、信仰の事實としては絶對者への愛の攝受を以て終局する。ゲーテは晩年エツケルマンにファウストの救濟問題に就て語り、第二部の天使の和唱の句「靈界の尊き人は惡より救はれたり。不斷に精進努力する者をこそわれらは救はめ。しかも亦彼には天上の愛が賦與せられたれば、聖なる群は心よりの來迎を彼に捧げん。」といふ言葉を引用して、『此の句にこそファウスト救濟の鍵が含まれてゐる。即ちファウスト自身に於てはその最後まで、愈々高く、愈々純粹なる活動があり、天上から彼を救はんとして來迎する永遠の愛がある。この消息は完全にわれらの宗教的なる考察と一致する。即ちわれらは單に自力のみに依つて救はるるものではなく、われらに加へらるる神の恩寵によつて救はれるからである。』と説明してゐる。かくして、ファウストの如き精進のたましひは、その如何なる迷誤にも拘らず常に神の「善き人」であり、神の永遠の大洋に向つて日夜に流れて停ることを知らない江流であることが知られる。

ゲーテに於ける世界文學の概念規定

ゲーテが『西東詩篇』の冒頭に、『北と西と南は分裂し、王位碎げ領土は震ふ、……』と歌つてゐるやうに、彼の晩年の歐洲は奈翁によつて捲き起された戦渦の巷として、ゲーテの所謂、『「清明の東方」を除いて、暗雲低迷の光景を呈してをり、奈翁の没落後と雖もこのあらしの影響、その混乱の整理の爲に提示される種種なる問題が尙幾十年清算せられずに残つた事は、歴史の示す處である。ゲーテの晩年も正にこの影響の渦中に置かれたものである。従つて詩人としての彼がこの嵐の中に如何に處したかを見ることは、其の時代思潮に對する異常なる敏感性と理解力を以てする彼の天才に於て殊に興味深い問題である。素より予に與へられた紙幅に於てこの問題を全體的に検討する事は不可能であるが、ゲーテが此の時代的影響によつて提示された問題の一つに就て此處に概観しようと思ふ。この問題はゲーテの晩年即ち一八二〇年前後からその終焉に至る迄の約十年間、絶えず彼の興味を中心として、その念頭を去らなかつたものである。我等が今彼の歿後百年、彼の業績を回顧する機會を與へらるるに際して、偶々、我等の置かれてゐる雰囲気はゲーテの晩年のそれと極めて相似たるものある事を考へ合はせる時、ゲーテの興味を中心となつたこの問題が、我等自身の問題として新たに蘇つて來る事を感ずるだけ、彼を記念すべき好箇の問題と考へられるものである。

それは世界文學 (Weltliteratur) の問題である。ゲーテはこの言葉の持つ獨自性に於ける創始者であ

る。即ち此の常識的名稱が『斯くあらねばならぬ世界文學』の概念規定を彼から享けた意味に於て、ゲーテは『世界文學』の産みの親である。彼の所謂『世界文學』は『世界文學史』の名の下に考へられる如き『世界の文學』ではない。現實に存在してゐる世界の文學作品の並存的總稱ではなくして、ゲーテの本來把持してゐる藝術觀が時代の情勢に觸發せられて、自ら成長し來つた成果である。即ちゲーテに於ける世界文學の概念は文化財として、人類社會に占むべき最高位の文藝作品に賦與せらるべき文學の *Idea* である。而してこの *Idea* の到達する彼の文藝思想展開の歴史的徑路は、彼の人格の成長と有機的相關に在るものである。我等が『フアウスト』の第一部から第二部への推移に於て、或は『ウイールヘルム・マイステルの修業時代』より『遍歴時代』への過程に於て、切實にゲーテ自身の内面生活に於ける進展の跡を見ることが出来るやうに、若きゲーテの *Individual-Poesie* から、老ゲーテの *Welt-Poesie* への推移の上に有機的成長を見る事によつてのみ、彼の思惟する『世界文學』の理念を理解することが出来る。文藝作品は、その本來の性質上飽くまで個性の表現であらねばならない。たとひ、その表現の成果が如何なる形態として提示されようとも、若しその藝術に人の心を打つ生命の力があるとすれば、それは必然的に創造的個性の生命の熔爐を通つたものであらねばならない。青年ゲーテは『獨逸建築藝術に就て』の中に、唯一の眞實なる藝術を以て『性格的藝術』であると論じ、是れを理解して、作者の生命を吹込まれる事に依つて渾然たる有機體形、即ち『單純にして

偉大』、『全一にして生生』たる作品、美を第一條件とせずして必然的に美を附隨する『生命の藝術』と爲してゐるものが即ちそれである。藝術作品を以て、一箇の有機體であると見るこの見解は、ゲーテの生涯を通じて少しの變化をも示して居ない。例へば一八二〇年頃の言葉に、『眞實の藝術作品は健康なる自然の生産の如く、それ自身から批判されねばならない。』とある如きは、この同一なる見解から發するものである。

此の『個性藝術』の根幹から展開される『世界文學』は如何なるものであるか。結論を直截に述べらるならば、個體乃至國民の『特殊性』を生かし切る事によつて、『一般人間的なるもの』の有機的完成に參與する權利を獲得する文學の謂である。一國民の文學の單位は個性の藝術である。多様な個體の特殊性から國民文學は極めて多彩なる光景を示す。ゲーテは獨逸文學に關して、『相互に抗爭しないまでも、異種の諸要素が一個の獨逸文學を構成するのを見る。それは本來同一國語を以て書かれる事によつてのみ一つのものとなつてゐるに過ぎず、全然異なる素質、才幹、思惟、行爲、判斷、實行から漸次國民の中核を明るみに押出して來たものである。』(Juliauns-Ausgabe. Bd. 38 S. 97/98) と觀察してゐる。ゲーテのこの觀察の當否は別としても、(R・M・マイヤー氏の如きは明にこれに反對してゐる。)多彩なる國民文學を貫いて、これを全體として總觀するとき、其處から一國民の獨自性、ゲーテの所謂『國民の中核』が否定し難い事實として觀者に迫る事は、たとひこれを明確な

る概念に包攝する事に成功し得ない場合でも、充分に肯定し得るところである。斯くして世界文學構成の單位は個性を通して築かれた國民文學である事が考へられる。ゲーテの思想構成に於て、部分と全體、特殊と普遍が常に對立矛盾すると共に、この矛盾に於てのみ、その有機的相關が考へられ、全體の生命展開が可能であるやうに、ここにも亦世界文學に對する國民文學に於て同一なる關係を與へてゐる。『各特殊性に於て……國民性、個人性を通過して、かの一般的なるものが愈々輝き出づるを見るであらう。』(J. A. Bd. 38. S. 141)と言ひ、一國民が異なる他國民の特殊性を知る事に依つてのみ、眞實の意味に於ける交通が可能である事を述べてゐる。何となれば、他の特殊性を正しく認識理解する事に於てのみ『人類』の有機體形構成へ參與し得る基礎が與へられるからである。『眞に一般的寛容は、人が各個人、各民族の特殊性を云謂することなく、然も眞の功績はそれが全人類に屬する事によつて特出すると云ふ確信を把持する場合に最も確實に達せられる。』(同上)ゲーテは彼の意味する世界文學を説明する爲に、この種の個人對人類の關係に移して繰返し述べてゐる。例へば、自己の従事してゐる仕事果して有益なものであるか否かを考へる場合、『何人にも最早意の儘に、落ちついて、平和に、節度を以て、且つ要求もなく生活する事が許されない』時代、即ち『外界は激しく動搖して各個人が渦卷の中に捲き込まれやうとする』時に、(J. A. Bd. 38. S. 204)自他の爲につくす處あらんとする者の問題は、何によつて自己に課された責務を果すべきかに在る。この場合、我等

に残された唯一の事は、『唯最も純粹な、最も嚴格な主我主義のみが我等を救ふに足る。』(同上)と言ふことである。この『至純なる主我主義』こそは、人をして眞に自己の特殊性を認識せしめ、やがてそれを極度に修鍊することに依つて、人類に奉仕しようとする意欲を生むのである。これらの言葉はわれらをして自ら『ウィルヘルム・マイステルの修業時代』の言葉を想はしめる。その言葉は上述の場合に述べられた言葉よりも更に明白に、特殊と普遍の關係を明にし、相關的に我等の問題に光を與へるものである。『一切の人間のみが人類を形成する。一切の力のみが、總合せられて、世界を形成する。これらの力は屢々相互の間に抗爭する。然も、彼等が相互に相破壊せんと努める間に、自然は彼等を結合して、再びかかる力を生み出すのである。』ゲーテの世界文學に於ける『一般人間的なるもの』の概念は、『道義的、審美的一致』を意味してゐる事は否定しないと同時に、『世界文學』の基礎概念の中に、國民文學の特殊性を強調してゐる點から推論するならば、かの抗爭する力の統合としての生きたる一全を以て世界となし、人類の概念は抽象的なものではなく、各特殊性を以て參與する人間全體の集團としての人類を常に考へてゐた事實に照應して、各國民の特殊性を最もよく提示する國民文學の生産が世界文學の前提たることをゲーテは考へてゐる。勿論、一國民の文學が世界文學たり得る爲には、それが全人類に通ずる道義的、審美的要求に觸るべき普遍性を前提として持つべきは當然である。この一般妥當的側面を主として見たゲーテの言葉としては、世界文學の擴大であ

るといふ意味の言葉『廣き世界、たとひ、それが如何に廣汎であらうと詳細に觀察すれば常に擴大された祖國にすぎない。』といふ言葉に世界人としてのゲーテの態度を見る事ができる。寧ろゲーテの所謂『一般人間的なるもの』の概念は、世界人としての彼に於て、この普遍的側面のみを意味するものと採るべきが、一見妥當であるときへ考へられる。それにも拘らず、この世界人は、『世界文學』の規定に當つては、『國民性、個人性を通して』のみ『一般的なるもの』へ到達せんことを認めようとする。一般妥當性、即ち『全人類に屬するもの』を背景乃至究竟の標的として國民の特殊性をでき得る限り表出し得たるものこそ、世界文學たり得るものである。特殊は普遍を認識することによつてのみ成立する。全體の成立は部分の完全なる獨自性の自覺と、その獨自性を完全に生かし切る事によつてのみ、全體の機制を促進せしめるものであることの認識のみが、眞に部分を全體内の存在として許し得るのである。故に世界文學を構成すべき『國民文學』間の關係は、相破と同時に相成の矛盾律にあらねばならない。『各國民は、色色の個有性を持つてゐる。それによつて他國民と區別される。而してこれが亦諸國民が相互に分離し、索引或は反撥を感ずる原因である。』(J. A. Ed. 38 S. 204) の『力の抗争』即ち一國民を主體として考へるならば、自國民の持たざる異なる特性の刺戟によつて、自國の特殊性が初めて明確なる認識にまで浮び上つてくる。同時にこの特殊性を生かし切らうとする生き生きした國民的生命の緊張を齎らすものである。ゲーテはこの事に關して、『全ての文學は、

若し夫れが他國の文學の關與に依つて再び振起せらるる事がなければ、遂には自體内に懈怠する。』(J. A. Ed. 38 S. 137) と言つてゐる。この自己の特殊性の振起、畢竟文學に於て謂はるべきよき主義は、他の領域に於て往往にして見らるる如き排他主義乃至侵略主義ではなくして、主義の徹する處に世界へのよき刺戟が生れ、相破がやがて相成を意味するに至るものである。故にゲーテはフランス文學を賞讃して、それが最高度に國民的なるが故に、同時に最も多くの影響を他國民の文學に及ぼした所を見てゐるのである。更にゲーテが獨逸文學に關して、『予は確信する。今や普遍的世界文學が構成されつつあるが、それには我等獨逸人に名譽ある役割が保留されてゐるのだ』(J. A. Ed. 38 S. 137) と言つて密かに自己の藝術を以て世界文學への獨逸の寄與の主體たる事を示してゐる。事實獨逸文學は、彼の『ウェルテル』を以て初めて世界の文壇にその雄歩を進めたと言つても誤りではない。而して彼の『ファウスト』程に獨逸國民の特有性を表現し、同時に全人類的なものはないのである。これら偉大なる作品の世界への反響と共に、事實ゲーテを中心にしてワイマルは、當時歐洲文壇の聖地の如き觀を呈してゐた。北歐の詩人オーレンシュレーゲルがこの聖地に錫をひいたのを初め、バイロンもその訪問を約するあり、伊太利にはマンツォーニ、フランスにはユーゴーの如き、深くゲーテの詩風に傾倒した。殊にスコットランドの哲人カーライルの如きは、その思想の根柢をゲーテに負つてゐるといふ事の過言でない程に、その生涯を通じてゲーテを愛好し愛誦し翻譯した

のである。獨逸文學が外國文學に對する關係に於て、過去幾世紀の間、模倣追従の一方的徑路を辿り來つたのであるが、十八世紀に至つて初めてゲーテの先輩なるクロッパシュトックやレツシング等の天才に於て、國民的自覺と獨自なる藝術創造に向つて精進する精神が激しく燃上つた。併しこれらの諸先輩は、フランス語をその用語とし、フランス文學を唯一最高の文學と考へてゐるフリードリヒ大王の治下に在つて、その制作の嘉納を獲得する爲に多くの悩みを體驗せねばならなかつた。當時洛陽の紙價を高めたクロッパシュトックの雄篇『メツシアス』の如きも、此の王に近づける爲にその最初の一部をフランス語に翻譯するといふ試みさへ爲された程であるが、それさへ王の顧問ヴォルテールの一笑に斥けられたに過ぎなかつた。これらの諸先輩の努力は遂にゲーテに至つて報いられた。彼はその異常なる詩的感情性と、その天才的表現力との幸福なる融合に依つて完全に世界文壇を征服し得たのである。ゲーテを中心とする十八世紀末、十九世紀初頭の獨逸文學がシュトトリヒの言ふが如き理由、即ち歐洲文壇一般のコンステラチオンがフランスの啓蒙的主知文學に漸く倦怠を覺えて、新鮮なる主感的浪漫的傾向の文學を求め風潮に向つた際に、その浪にのつたといふ外的事情もあつたであらう。併し獨逸文學をして世界文學たらしめた第一の要因は、ゲーテの感情性の強さとその表現力、即ち彼の詩的天才性に在らねばならない。彼はその天才力に依つて完全に當時の世界を征服した。シュトトリヒもゲーテの世界文學に對する重大なる役割をやはり彼の天才性に歸してはゐるが、主

として彼の天才の役割を獨逸國民の持つ反普遍性の克服に見ようとしてゐる。この點は可成り異論をさし挟まるべき點であらうと思ふ。シュトトリヒの擧げてゐる獨逸文學に獨自なる反普遍の諸條件——國民意識の缺乏、個性價値の強調、獨逸的人間の心的孤獨性、獨逸文學の要求的觀念主義の精神、反文明的の精神——が悉く獨逸文學を世界文學たらしむる障害を爲したものであるか否かは、甚だ疑問とする處であつて、これらの諸條件はゲーテの世界文學の理念よりすれば、寧ろ獨逸文學をして世界文學たらしむべき國民的特殊性を構成する諸條件ではあるまいかと考へられる。この點に關しては、ここに詳細にシュトトリヒの所説を検討する餘裕はないが、予を以て言はしむるならば、ゲーテの天才が自己の藝術を世界文學の共有財たらしめたものは、寧ろ彼の天才が、これらの諸條件、即ち最も獨逸的なる特殊性の典型的表示であつた爲であり、従つてゲーテの所謂エゴイズムス、即ち世界意識に立つ主我精神に純粹に生きる事によつて自ら招來した結果であり、自己の本來性に托乘して到達し得たる成果であつて、決してシュトトリヒの所謂 *das so unsagbar schwere Werk* (Fr. Strich, *Dichtung und Zivilisation*, S. 73) ではなかつた事は、ゲーテの制作の過程とその詩人性を考察するものの認識するに困難でないことであらう。

⑨ 以上ゲーテの抱懐する世界文學の理念に就て概説した。即ち世界文學の理念は當然國民文學の概念と密接なる關聯に立つものであることは、恰も人類の概念が個體の概念なしに考へ得られないと同様

である。従つて國民的對立が明確でないところには、世界文學の理念は存在し得ない。勿論詩人の所産がこの理念なしには世界文學財たり得ないと言ふのではない。古代ギリシヤ、ローマに於ては、未だ近世歐洲に見らるる如き文化國民の對立が見られない限り、國民文學、従つて世界文學への概念分化にまで到達しては居らず、この意味に於て古代に於ける世界文學の明確なる理念を識ることはできないけれども、ホメールの藝術がギリシヤの國民精神の表現として、一般人間のなるものへの參與權を要求する事ができる意味に於て、世界文學財たり得るを妨げない。ゲーテがエツケルマンに語つて、『詩は人類の共有財である。』（一八二七年一月三十一日）と言つた場合、ホメールは言ふまでもなく此の概念中に包含せられる世界文學であるが、同じく世界文學に關して、『佛英獨間の密接なる交通に於て、我等が互に相訂正し合ふやうになつた事は極めて好ましいことである。』（一八二七年七月十八日）と言つてゐる場合には、それは嚴密なる意味に於て古代文學には妥當しないことである。茲にゲーテが世界文學を提唱するに至る人類の歴史的社會發展過程に於ける必然性を見なければならぬ。ゲーテは一八二七年一月三十一日の條でエツケルマンに次の如くに語つてゐる。『國民文學は今や多くを語らうとしない。世界文學の時期が到來したのだ。各人はこの時期を促進せしむる爲に努力しなければならぬ。』と。世界文學の理念がゲーテにとつては文學の最高形態の理念なることは前に述べたが、それが單純に彼の形而上的理念ではなくして、ゲーテの晩年に於ける歐洲の社會情勢

が、彼をして事實、『世界文學の時期』に到達した事を信せしめたものである。彼はこの時期を *miterleben* し得た幸福を悦んだのである。一八三一年、彼の死の前年の書いた『社會構成の諸期』に於て、明に十九世紀初頭の歐洲の文化が社會構成の頂點に達した事を示してゐる。彼は人類の社會構成の發展形式を三階梯に分けてゐる。そしてその各時代にそれぞれ照應する文學が考へられる。第一期は『牧歌期』である。この時代にあつては社會的集團の構成が狭少であり、家族的なる結合によつて、粗荒なる外界に對して自己の存在を確立擁護する必要があつた。この時代には、人はその戀人の爲にのみ歌ふ事を知つてをり、その母國語にのみ執著する時代である。第二期は『社會期乃至市民期』である。この時期に入れば、第一期の集團が次第に擴大し、内面的交通が一層活潑となり、他集團の言語に對してもその影響を拒絶しない。各集團は未だ分立してゐるけれども、相互に次第に接近して他を排斥する事がなくなる。第三期に至つてこの集團は益々その内部から膨脹し、對外的には相互の接觸が遂に渾然たる融合を要意するに至る。彼等は相互にその希望目的が同一なる事を認識するに至るが、併し未だ全く區分的境界を撤するに至らない。この時期を『流通期』と呼ぶ。現代は即ちこの第三期の完成期、即ち謂はば『世界期』に這入つてゐるものである事をゲーテは信ずるものである。上述の三期を經過し來つた人類は、今や一切の教養ある集團の結合、唯一なる目的の認識、『事實上の意味でも理想上の意味でも刻下の世界過程の諸狀態を識る事の如何に必要なるか』を共通に認識する

に至つたのである。この時代に於ける文學は如何なるものであらねばならぬか。「一切の外國文學は自國文學と協調を保つに至る。」のであつて、即ち前述エッケルマンの對話に述べられた「世界文學の時期」に照應するものである。

十九世紀初頭に於けるこの諸國民の接觸、活潑なる交渉、「唯一の目的」の自覺、世界合一の傾向は如何にして生じたか、ゲーテはこれを、歐洲全體を覆うたフランス革命以後の動亂、戰禍に歸してゐる。一八三〇年、ゲーテは世界文學の發生の動機に關して次の如く書いてゐる。「あらゆる國民は最も恐るべき戰爭に於て相互に震盪せられ、やがて再びそれぞれ己れ自身に復歸した後に、彼等は多くの異國的なるものを認識し、これを自己に攝取し、これまで知られなかつた精神的なる要求を時時感ずるに至つた事を認めねばならなかつた。そこから隣接關係の感情が起り、これまで自己をとざしてゐた代りに、多少の差はあるが、自由なる精神的交易の仲間に加へられたいと言ふ要求が漸次に精神内に萌して來た。」と (J. A. Est. 38 S. 212)。ゲーテは動亂による國境の撤去を見、そこから招來せられた文化のあらゆる方面に互つての變化を考察して、來るべき文學を「世界文學」の理念の上求めたのである。彼は繰返して時代の重大性を述べ、かかる時代に於て文學者の正にとるべき態度を警告してゐる事は注意すべきことである。「心ある文學者は一切のほじくり事を止めて、交易の大世界を見渡すべきあらゆる原因を見出す。」(同上 510) と言ひ、或は「彼等(各國民)は相互の間に

永遠の嘲罵をとり交す事を止めて、より高き立場から相互を観察し、彼等が長い間躑躅してゐた狭少なる範圍から歩み出でんとする決心をしなければならない。」(同上 514) と言つてゐる。これらの言葉は何れも文學者に對して世界の正しき認識を要求し、その認識による「より高き立場」から全人類の藝術を産み來るべき事を求むるものである。素より藝術が個性の所産であり、國民の特殊性を最強度に活かすべきものである事は最初に觀察した如くであるが、唯この個性がゲーテの信する社會構成の歴史的發展と共に成長して、その人生觀世界觀が個人的興味から人類の關心にまで成長擴大する事が重大である。詩人が國民的特質を強度に所有すると共に、世界人として持つ認識の深さに應じて、求めらるべき世界文學の生産價値が決定さるるのである。

ゲーテが世界文學を提唱して百年、彼を記念すべき機會に當つて、世界の現状を顧るとき、當時彼の置かれた歐洲の情勢が今やその儘現代世界の情勢として繰返へされてゐるの感極めて深きものがある。唯、ゲーテに残されてゐた「清明の東方」も亦この動亂の渦中に捲き込まれ、ゲーテに於ける「世界」は主として歐洲を意味してゐたのに反して、今や字義通に全世界、全人類がこの大浪に漂うてゐるだけの相違である。而も、そのことはゲーテが世界發展の完了期として豫言した「世界期」に相當すべき時代たる事を、愈々切實に確證しつつあるに過ぎない。この時代に當つてゲーテの提唱した世界文學への要求も亦、たとひ、その細部に互つては、時代、方處の情勢に伴ふ變化があるにして

も、愈々その強度を加へる筈である。ゲーテの姿が今我等の追憶の裡に蘇へる意義は必ずしもその百年祭の機會に據るに止らないのである。

ゲーテと世界文學

一八二七年一月三十一日エツケルマンがゲーテを訪ねると、ゲーテは彼に恰度今支那の小説を讀んでゐる旨を語つた。此の小説の標題が何であつたかは彼が洩してゐないので不明であるが、いづれにしてもゲーテは此の小説が「異常に」自己の興味を惹いたことを告げ、つづいてその作品の印象を此の若い弟子に物語つて居る。それによると、此の東洋の物語に於ては人物の感情なり行爲なりは取り立てて西洋のそれと異なつたものを見ないが、唯西洋の物語風と著しく異なる點は、自然の風物が常に人物と共に生きてゐることである。「池の中の鯉魚は絶えず水を打つて躍り、樹上の鳥は不斷に啼き、日は常に明るく晴れ、夜は常に澄み、月について多くの言葉が述べられてはゐるが、それによつて自然の風光に變化があるのではなく、月光は日中と均しく明るく考へられてゐる。」人物を描くにしても、すべてが明朗で道德的で節度があり、相愛の男女が夜數刻を對座しても相互に相觸るることをさへしない。「此の嚴格な節度によつてこそ」支那帝國は數千年の存續を得てゐるのだとゲーテは感慨を洩してゐる。そして支那に於ては此の種の文學作品は、獨逸の祖先がまだ杜の中に生活してゐた頃に既に存してゐたと教へてゐる。ゲーテの支那文學に關する知識がどの程度であるかは知るに由ないが、人間の生活と自然の情趣とが渾然として融合してゐる東洋文學の特質が早くもゲーテに深く印象し、同時に諦念の哲人たる此の老詩人が東洋藝術の繪畫的節度、アポロ的明澄性に共鳴したこと

は極めて興味ある挿話である。

此の支那文學の話題から促がされて、ゲーテは晩年の彼の最大の關心事の一つである「世界文學」の問題を取上げて話し続ける。「自分は、文藝は人類の共有財であるといふ感を愈々深くしつつある。」到る處、あらゆる時代に人類の此の共同財に寄與せんと努力してゐる。或る特種の國民なり、詩人のみが自分を天才者として思ひ土るべきものではない。

「もしわれわれ獨逸人がわれわれ自身の環境の狹隘な圏外に目を注ぐことをしなければわれわれは極めて容易にこの術學的な獨りよがり¹⁾に墮る。それ故に自分は好んで他國民について求め、各人に同様のことを薦める。今や國民文學は多くの意味を持たず、世界文學の時代が到來してゐる。各人は今や此の時代を促進する爲に努力しなければならない。」

此の言葉に於ても見られる様にゲーテに於ける、「世界文學」の意味は、世界に存在する文學作品的量的總和をいふものではなく、人類の文化財として眞に人類の生長に參與する力を持つ作品即ち質的存在としての文學である²⁾勿論それが直ちに藝術的價值評價と關係するといふのではない。即ち此の人類の共有財たるべきものが悉く最高位の文藝作品たることを必要とするといふ程の意味では必ずしもない。最高位の藝術が常に人類の文化財たることは言ふを要しないが、それ以外にもかかる高度の藝術を生み來るべき温床的存在、文學的天才の創造的衝動を自覺し來るべき刺戟的作品は悉く此の

世界文學の有機制を構成すべき要素たり得るであらう。ゲーテが支那の小説に觸發せられて、他國民の聲に聞かんことを提唱したのは、支那小説の文藝的價值よりも、その獨逸文學に對する異質性に重點をおいた爲である。

茲に當然問題となつて來ることは國民文學と世界文學との關係である。此の問題はゲーテにあつては特殊と普遍、個人と全體、國民性と人間性との關係と切離すことができないものである。ゲーテをして言はしむれば、「一切の人間のみが人類を形成する。」而して此の一切人は悉くそれぞれの異なる個性に生きる個體である。そこに力の葛藤が自ら展開せられ、それらの力の諸關係に於いて反撥と牽引の緊張關係が一般的事實として提示せられる。それは生のすがたである。此の緊張葛藤が一定の秩序と法則のもとに行はるる處に全體的生長が豫想せられる。生命の生長進展のある處には、調和と闘争が常に豫想せられねばならない。これは同時的要請である。闘争のない調和は死であり、調和なき闘争は渾沌である。それも亦死と均しく全體性の解體へ導かねばならない。ゲーテの晩年に於ける歐洲諸國の關係はフランス革命につづくナポレオン政權の下に震撼せられて、諸國民間の關係に著しく動搖を來して居り、在來の均衡を脅かしてゐると同時に、一方から見れば此の渾沌こそは新しき調和への曙光とも見られたのである。戦争に依つて齟らされた國境線の動搖、民族間の交流こそは、それぞれの國民の生命力を活氣づける動因として働いて來る。茲に異質的要素の交流による新たなる

自己認識が行はれ、自己の獨自性がより明確に自覺せられて来る。ゲーテに於る世界文學の主張が、かかる國民性の自覺の時代に生れたことは即ち特殊と全體との關係を最も具象的に提示するものとして興味深いものがある。何となれば、彼の意味する世界文學は國民的特殊文學をその基底として構築せらるべきものに外ならないからである。「明らかにあらゆる國民の最も優れた詩人、最も美的な文筆家は已に古き昔から一般人間的なるものを目指してゐた。それが、歴史的であれ、神話的であれ、寓話的であれ、乃至は多少に拘らず假構的なものであれ、人は一切の特殊性のうちに、國民性個人性を貫いてかの一般的なるものが輝き出づるを見るであらう。」ゲーテが先きに世界文學に對立せしめて述べた國民文學は、世界文學の基礎的前提としての國民文學の謂ではなくして、彼の所謂「術學的獨りよがり」の鎖國的文學を意味する。國民文學をして、眞に生成發展せしむべきならば、それが先づ自己の特殊性に眞に生き切ることが必要である。ゲーテの世界文學の提唱は一面此の國民性に生き切ることによつてのみ可能である。彼自らその文學的實踐によつて之を示したものである。世界文學の最高峰に位すべき彼のフアウスト、ウエルテル、ウイールヘルム・マイステルの如き諸篇は、彼のうちなる獨逸國民精神を自發的に燃焼せしめたものに外ならない。彼が主張して混迷の世相に於て、爲すあらんとする者に殘されてゐる唯一の結論は、「唯最も純粹な、最も嚴格な主義のみが我等を救ふ」といふ事實であるといつた言葉は、先づ自己に生き切ることによつて、そこから生れ来る國民文學が

高く人類指導の標的として大空に輝き出づるといふ事實につらなる言葉である。もし國民文學が高くその障壁をわが周圍に廻らして、自分のみを高しとする意味のものであるならばそれはやがて自家中毒を起して亡ぶべき運命におかれてゐるものである。ゲーテの言葉を以つてすれば、「全ての文學は、若しそれが他國の文學の關與に依つて再び振起せらるる事がなければ、遂には自體内に懈怠する」であらう。われらは自己の生命の根を深く自國の土壤と歴史のうちにおろすことを忘れないと共に、その樹冠を限りなく大空に押し廣げて、世界文化の大氣を呼吸すべきである。かくてこそ「廣き世界、たとひ、それが如何に廣汎であらうと詳細に觀察すれば常に擴大された祖國に過ぎない」といふゲーテの言葉の意味を理解し得るであらう。ゲーテが意圖した世界文學の建設は、國民的土壤に根をおろした多様な喬木が自由なる世界の大氣のうちに互に枝を交へ目もあやなる花を織りなす一大偉觀の顯現である。しかもこれらの樹枝の間には不斷に生命の交流が行はれて、相共に無限の天空へと延び行くべきものであつた。

『若き詩人に宛てて』

—ゲーテの最後の言葉—

文壇に野心のある青年が、その作品を自分の指導者と目指す大家に送つて批評を乞ひ、その天分の承認を求めようとすることはどこでも同じである。その需めに快く應ずることは先進の義務ではあらうが、仕事を持つてゐる作者に取つては可なりにわづらはしい負ひ目であり、良心的に義務を果し得ることは殆んど不可能であらう。ゲーテも亦かうした人人になやまされた一人であつたが、しかしかうした人人の需むる心は大體その軌を一にしてゐることと、その信頼に答へる氣持から、かうした若い文學愛好の青年の爲に筆を執つてその感懐の一端を洩さうと企てた。此の八十二歳の老詩人の言葉は（恐らく一八三一年頃のものゝ推定せられる）、彼の死の前年か、乃至は直前にかたられたものとして、若き詩人への彼の遺言と見たてゐることもできよう。此の『若き詩人の爲に』書き残された言葉は極めて短いものではあるが、彼の永い文壇生活の體驗が壓縮せられて、その表現を取つたものの様な極めて貴い味を含んでゐる。世の中の色々な苦勞をしつくして來た年寄りが若い者に云つて聞かせる言葉には、たとひ言葉の表面の響に卓抜な理論を含んでゐないにしても自然に頭が下がるものがある。元來氣取つたものの云ひ方をしないゲーテではあるが、人生への深い諦觀に立つて、眞實以外の何ものをも語ることを欲しない様な、無駄の無い、脂の抜け切つた、それでゐてしみじみと人の魂に迫るその言葉は、百年後の今日でも充分にそのはたらしきを失はないものがある。殊に當時の歐洲は七

『若き詩人に宛てて』

月革命の直後であり、血の氣の多い青年詩人達の關心が、ハイネとかビョルネなどいふ猶太系の文士を先頭にして、政治的な運動へ移行しようとする機運を示してゐる所謂非常時であつたことを思ひ合せらば、大きな動搖の中に、寂然としてそり立つグラニート、大地の底からそのまま盛り上つたものとしてゲーテが好んだあのグラニートの巨體そのままの落著きを示す彼の態度には『不安』の波に溺れかけたり、のぼせたりする若い人人に取つて——彼等の焦躁が、にせものか受け賣りでない限り——沙漠の緑地たり得ないと誰が云ひ得よう。

素よりゲーテはこれら後進者に對して自ら先達とか師表とかいふ資格を僭稱してゐない。『自分は何人の師でもなかつた。』『だが自分が獨逸人一般に對し、わけでも若い詩人達に對して如何なるものとなつたかを言へとならば、自分は敢て彼等の解放者と名のつてよからう。といふのは、人間は、どんなにして見ようが結局はその個性を明るみへ持出すに過ぎないのだから。人間が衷から外へ生きねばならぬ様に、藝術家は衷から外へ働き出さねばならないといふ事實を彼等はこの私の上で見極めたのだ。』これは又何といふ自信に充ちた強い言ひ方であらう。自分はそれ丈けのことをいふのは單純な言葉の上のことではなく、六十幾年かに互る自分の永い文壇生活に於て、自分の血と汗を以て書いて來た文字のことである。自分はこのことを『行』によつて彼等に實證したのだ。彼等はそれを私といふ存在の上に (an ihm) しかと見て取つてゐる。自分が彼等の解放者であることは論議のテーマで

はなくして何人の前にも公言し得る事實である。かうした言葉を書いたゲーテの目には六十年前の若き日の自分の姿がはつきりと浮んで來たことと思ふ。今でこそ『ゲッツ』や『ウエルテル』の名はわれわれには親しみのある響を持つてわれわれの感情に話しかけるのではあるが、それが發表せられた當時にあつては洵に青天の霹靂であり、所謂『健全なる人間の悟性の限りなき砂原の中に突如として噴出した火山』であつたのである。今でこそ智情意と人間の心の働きを大別することは小學校の子供でも知つてゐるが、十八世紀の前半までは、人間の心の作用を表象の能力と意欲の力とに大別して居り、感情のはたらきには、それらと肩を並べる資格は與へられてをらない時分のことである。藝術は道德の従僕であり、藝術の目的は道德の寓話的表現にあり、最高の藝術は寓話に止めを刺すといふ考へを權威として疑はれなかつた時分に『地上の一切の所有のうち、わが心こそ最も尊きもの……頭が凡てである人間は憐むべし。』などと眞實の感情を卒如として一切の人間の財寶の上に置換へ、思切つた『價値の轉換』を行つた無名の一青年ゲーテ(『ゲッツ』は匿名で發表したがやがて間もなく作者が Gode とか Gide とかいふ男であるといふ噂が高くなつて來た)は正さしく最も勇敢なる革命兒であつた。彼は人間に於て眞に尊ぶべきものは何であるかを大膽に宣言して、理智と無批判の道義の首枷から大衆を解放した。『ウエルテル』に對する『愛國の士』の憤激は殊に甚しかつた。それは青年を毒する書であるとして排撃せられたことは近世に於けるニイチエ哲學の呪咀を思はせるものがあ

つた。ゲーッエなどいふ坊さんは『二十年前までは自殺が讚美されるなどいふことは絶えて無かつたことぢや。』と天を仰いで長嘆した。ライプツィヒでは『ウエルテル』を読むものには百ターレルの罰金を科する旨の發令があつた。こんなことを挙げると際限がない。それは坊主や役人に限らず、當時の文壇の大御所たるレッシングやクロップシュトックさへ此の若い革命兒に對しては好感を持つて對しなかつた。レッシングの如きはむしろ憎惡の目を以つて彼を批難してゐる。彼はその所謂『天才を鼻にかけてゐる』ゲーテに對しては全く理解を持ち得なかつた。彼の様な犀利な頭腦の持主であり、時代の先驅者であり、沙翁劇の讚美者なる者でも、勿論啓蒙思想の殘滓から全く脱却し切れないことがその原因ではあつても、ゲーテの眞意を見ることのでなかつた最大の理由は、此の青年に對する愛が缺けてゐた爲である。われわれはここでも愛なき處に理解がないといふゲーテの言葉を思ひ起させられる。尤もゲーテの擧げた烽火に狂喜した青年大衆と雖も彼の眞實なる精神、即ち『ゲッツ』、『ウエルテル』に表現せられた作者の意圖を眞に理解し得たものは全くないと云つてよかつたらう。その點に於てはレッシングの様に、『ゲッツ』を批評して『或男の生涯を對話風に書いて、それで劇でございと號してゐる詩人』もあると皮肉たつぶりなもの云ひ方をするこゝも、上演の廣告の中で『劇中デブシーの舞蹈あり。』などと云ふ文句で客を引かうとする劇場監督も同様にめくらの角つき合ひである。『ウエルテル』などに就ても、主人公を以て、極めて單純な感傷主義者以上に見ること

を知らない者は昔も今も洋の東西を問はず一般的現象で、『ウエルテル叢書』こそは出なかつたが、ウエルテル宗——つまり自殺宗が繁盛して氣の弱い作者を非度くいやがらせた。一般大衆の受取り方も、レッシングなどの見方とは大した差別はなかつた。レッシングはウエルテルのモデルである友人イエルーザレムの爲にかんかんになつて怒つて、イエルーザレムはあんな感傷的な男ではなく、冥想的な哲學者であると反駁してゐるが、それなども『ウエルテル』を今少し親切に讀んで呉れさへすれば、レッシングの考へてゐる男と餘り違はない人物が、しかも一層深く描かれてゐることを發見するに左程困難ではなかつた筈である。それよりも手こづつたのはロッテのモデル問題で、その婿のケストネルとのかかり合ひであつた。これにはゲーテも可成り閉口したらしく、おれはこれを書かないではをれなかつたんだと非度く昂奮して爆發してゐる。

ゲーテの本質は茲にあつた。書かすにはをれない。これを發表しないで自分は窒息して了はねばならない。人間の裏から外への生活と並べて、藝術家の裏から外への活動を要求したことは、彼に於ては内發的必然性であるものを一般妥當的要請として書き表はしたに過ぎない。書かすにをれないものをうちに持つ者に取つては書くことが即ちその者の運命である。意志が運命と一如であるもの程強比較的容易に解決せられよう。勿論天才詩人たるの條件は此の内面的必然性の強さと同時に表現的才

能がゆたかにめぐまれてゐることが豫定せられるのであり、作家としての大小はその関係の深淺強弱の程度に依存することであるが、如何なる場合でも、書くべきものを持つことが第一の條件である。そしてその内的必然性に應じた表現才能が最も有機的な關係に於てはたらく時、たとひその詩人の全體が天才者と見ることができないにしても、まとまりのある成功せる作品を生み出すことができる筈である。不幸は作者の天資の弱少ではなくして、むしろ、表現的技巧によつて内部的弱少に天才的外觀を装はんとする野望である。乃至は外界の喧騒に亂されて自己を忘失するか、好んでその喧騒に和唱する者に於てはゲーテの求めるやうな詩人は見出されぬ。ゲーテは若い詩人に遺言して『自分が若い詩人にいくら真剣にすすめても尙足らないと思ふ程のことはおのれ自身をみつめよといふことである。』と云つてゐる。勿論晩年のゲーテの周圍に生きる青年達はもはや『ウエルテル』の時代の青年ではない。彼等の關心はたましひの問題よりも社會問題に轉向して來た。ゲーテはそのことを認識しないものではない。單純な認識に止まらず、彼の弾力性を持つたたましひが如何に時代と共に呼吸し、その歴史を彼の個人のうちに強く生きたかは彼の晩年の作品の傾向を見る者の容易に認める處であらう。例へば『ファウスト』の第二部、『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』の様な高度の藝術的表現を始めとして、彼の數數の散文、書簡、語録等を對比して見るがよい。勿論如何なる詩人と雖も生きる限り何等かの意味に於て、又何等かの態度を以て時代に對することはいふまでもない。そのこ

とは極めて弾力性の乏しい詩人、例へば自然主義時代にその最頂點に達してそれ以上に展びることを知らない様な詩人でも、生きてゐる限り、現代に對して何らかの態度を取ることが自明のことである。けれども彼の言葉には時代の脈搏は何らの關聯がない限り、彼のたましひは時代の歴史を生きたといふことができぬ。ゲーテが最後まで時代の歴史を生きたこと、否、その歴史のかなたまで、即ち彼の死のかなたまでの歴史を生きたことは如何なる他の詩人哲學者の比ではない。にも拘らず、彼は若き詩人に對して自己を見つめることをすすめてやまない。當時、最も多く叫ばれた言葉はフランスから吹いて來る風のまにまにドイツ全土をどよもした『自由』なる聲であつた。日本に於ても、初めて政治意識に目覺めた青年によつて叫ばれた聲がその『自由』であつたと同様に、當時政權への機會を約束せられたかに見えたドイツ青年達に異常なる魅惑の力を以てさけびかけた此の言葉は誠に蜜の如く甘く彼等の心を捕へねば止まなかつたことであらう。しかしながら四十餘年前に已にフランス革命を、その氣味悪い程の靜かな目を以て見詰めて、ドイツのあらゆる詩人、クロツプシュトツクやシルレルさへも一時はこれに和唱した間にあつて、それが人類の文化に如何にいまはしいものであるかを見極めて嫌惡したゲーテは、今や七月革命によつて再び動搖し始めた空氣の中で、彼の愛する獨逸の青年達が、ものの眞實を見ることを忘れて、『自由』なる言葉に陶醉し、ゲーテの所謂『その頭頂は星に觸るれども、不安の足はいづこにもかかり得ず、雲と風に弄ばるる』有様は彼を沈黙に了ら

せ得ないものがあつた。かうして社會的關心は彼の青年時代とは全く推し移つて來てはゐても、且つ前述の如く彼の意識は極めて生き生きと社會問題の解決に向つて働きつつも、尙且つ依然として彼が詩人として把持する眞實はかはらなかつた。否、その眞實こそは社會問題の解決に最もよく自己を實踐するものときへ思へるのである。即ち『自己を見よ。』といふ此の眞實は、個に徹することによつてのみ眞に時代の全體に生き得るといふ鐵案であるが故である。自己を見ることは、取り様によつては退嬰的なエゴイスマスを意味する。ハイネやビョルネがゲーテを批難した根據殊に後者が惡たいの限りをつくしてゲーテを罵つたことも歸する處、その退嬰的なエゴイスマスに他ならない。けれどもゲーテの此のエゴイスマスは狂犬が吠えついても、かみついても、びくともするものではない。八十年の間眞に『人間』の底つ岩根から疊み上げたこのエゴイスマス、彼が『遍歴時代』の中で云つてゐる『エゴイストとならぬ爲にエゴイストであらねばならぬ。』といふ意味の此のエゴイストは人間への深き深き愛を以て常に一切を見、その見ることに常に完全に自己を棄てることのできる意味のエゴイストであつたのである。

ゲーテがここで云つてゐる『自己を見よ。』との言葉は、彼のエゴイスマスの論理とは直接何のかはりがある筈はない。ゲーテ自身その氣持を以て述べてゐる風もない。唯『自由』とか『解放』とかに關聯して、關心を自己にのみ集中する彼の態度を批難する者がある場合に初めて、それ丈の解

釋が必要になつて來る。もし強ひて『自由』を問題にしたければ、それは今頃流行し出した『自由』のかけ聲よりも『自由』の眞實を體驗し『解放』の仕事を実證した此の自分を見るがよいといふのである。無批判に叫ばれる『解放』とか『自由』とかいふ言葉程恐るべきものはない。ゲーテは一七八九年のフランス革命に於てまのあたりこれを見た。『一部の自由の使徒、それらは自分には終始いまはしいものであつた。彼等は獨り残らず結局は我儘を求めてゐるのだ。』『彼等は自由の權利の爲に争うてゐると稱しつつ、よく觀察すると奴隷に對する戦ひであるのだ。』『こんな辛辣な言葉が革命の印象として記されてゐる。『自己を支配することを知らざる者は、常に奴隷である。』とも云つてゐる。ゲーテの意味する『自由』は常に自己の存在の明確なる認識、即ち個としての自己と全體との關係に對する自覺に目醒めて、全體の爲に自我の多くのものを *entgegen* する場合にのみ考へられる自由であらねばならない。さればこそ『一切を拘束する力から解放せられるのは、自己を克服する人間丈けである。』といふ言葉も出て來る譯である。故にここで青年詩人に與へる言葉のうちにも『自己を自由と宣言する事は非常な僭上の沙汰である。それは、同時に自己を支配せんと欲する事を宣言することになるからだ。たれかそれをよくするか。』と若い人人に對して厳しく質問してゐる。ここに至つて更に又『自己を見よ。』といふ言葉が生きて來る。自己を見ることは又自己がおかれる環境、社會の眞實なる認識へ導く。何となれば自己を捨象した一切の觀察は、或は客觀的觀察であるかの感

を抱かしむるが、事實は反對であつて、足が大地につかざる時、人は往往にして星を捉へ得ると妄信する。自己を通して見るとは、自己の我執を本位として物に對するといふ意味ではなく、反對に、自己を全體のうちにおいて批判することを豫定する限り、『我』と離れたる自己觀察を意味することはいふ迄もない。さればこそ『虚無なるもの即ち根柢なきもの』が排斥せられてゐる。ゲーテはゆたかな感情に恵まれた詩人ではあつたけれども、極めてじみな人であつた。——奇矯な言動とか、一時的な才氣にまかせて天馬空を行く底の表現、一口に言へば口から出まかせといふ風な言ひ方を好まない。例へばローマン派の人人に往往見られる言葉とか、ハイネやビヨルネの様なジャーナリストイックな鋭い思附きなどは彼の決して喜び迎へ得ないものであつた。たとひ彼の詩には感情の調子の高いもの——それは特に青年時代の作に見られる——があるにしても、それは決してその場限りの線香花火とは異なつて、大地の庭から噴湧する光焰ともいふべきもの即ち自己の本質内にその根柢を有する性質のものであつた。彼程自己の一步一步を見詰めつつその生涯を歩き通した詩人は稀である。彼の足はしつかりと大地を踏んで離れることがなかつた。しかもそれは彼の本質に萌す要求であり、後には明確なる人生觀となり藝術觀となつたにしても、それが彼の内在的衝動から發するだけ運命的な力を持つてゐた。彼は實に自己の道を常にはつきりと見詰めつつ進んで來た詩人である。その道は、百年後のわれわれが想見して華やかに描く様なものではなかつた。文壇人としての彼の道は誠

に淋しいものであつた。成程、その處女作『ゲッツ』は獨逸劇壇に革命的あらしをまき起した。その『ウエルテル』は全歐洲の讀書界を征服したものであつた。けれども、眞に彼が求むる如き意味に於て讀み取つて呉れた讀者が果して幾人あつたことだらう。獨逸文學に始めて眞實の抒情詩を惠んだ彼の青年期の詩篇さへも當時の文壇人はその正しい價値を以て受取つては呉れなかつた。ワイマルに赴いてからの宮廷生活も、周圍のもの美望や嫉妬を買ふ程の大公の寵臣として、その殊遇を一身に集めたことではあつたけれども、詩人としての彼の生活は決して幸福なものではなく『自分は網に引かかつた小鳥の様な氣がする。羽根は持つてはゐるが使ひ様がないといふ感がある。』と日記に書いてゐるのがその眞情である。大公を始として、宮廷の人人は文學を愛好してゐても佛蘭西風の趣味から脱却し切れず、眞にゲーテの藝術を理解するものは一人もをらぬと云つてもよい有様であつた。ゲーテが母とも姉とも熱愛したシュタイン夫人にしてからが、『エグモント』のクレールヘンの様な『小娘』を『自由の豫言者』にまで持ち擧げたことに對して不機嫌になるといふ有様であるから他はおして知るべきであつた。勿論當時のワイマルは獨逸のすぐれた詩人や學者が集つて、獨逸文化の焦點の觀を呈したことは事實であるが、ゲーテを中心にして考へる限りに於ては、絶えず不機嫌なヘルデルや消極的なウイラント、好意はあつても古い傾向のクネーベルなど決して眞にゲーテを理解し得た友といふことができなかつた。後になつてシルレルとの交友十年は僅に彼の心に明るいよ

こびを齎らしたけれども、シルレルは本来ゲーテとはその本質に於て反極に立つてゐる詩人であり、その故にこそ相互によりき刺戟となり合つたとはいふものの、それもシルレルの天逝によつて中斷せられた。もしシルレルが長生きをしたら、ヘルデルとの關係を繰返さぬとは實際は保證はできない徵候も見えぬではなかつた。浪漫派は始めはゲーテを神の様に尊敬したが、やがて極端に蔑視する様になり、彼等の目には『ウィルヘルム・マイステル』の如きは俗臭芬芬たる通俗小説としか映らなくなる。一方私生活に於ては、シニタイン夫人との決裂、クリスチアーネとの同棲に對する囂囂たる批難の渦中におかれ、それが七十五日だけでは済まされず、彼の全本質の批判に際しても、無理解な文學史家にあつては常につきまとふ有様であつた。やがて自由戦争の時代になると、非愛國者といふあり難くもない濡衣をおつかふされ、彼が獨逸を愛し、獨逸民族の運命に就て考へてゐた眞實は喧騒を極めた『愛國者』達の鉦や太鼓の響に埋めつくされた觀があつた。晩年のゲーテに對するハイネ、ビョルネ・メンツェル等のあくどい嘲罵のことは已に述べた。彼の人生行路に對する全伴奏が如何なる性質のものであつたかは、目錄風に並べたこれだけの項目を通して充分に視ひ知ることができよう。勿論彼は自己の孤獨に泣言を並べる風な詩人ではなく、自己の歩むべき道を最後まで歩みつづけた詩人であつた。ワイマルに来て五年後三十一歳の彼はその日記に『最もよきことは深き靜寂だ。その靜寂の中に處して、おれは世間に對して生き、成長して行く。そして世間が、焰を以ても刃を以てもお

れから奪ひ得ないものを獲得するのだ。』と書いた。更に四十七歳の彼は『人はその教養と仕事に於て、自然と藝術の最も嚴格な要求に留意すること多ければ多いだけ、外部からの純粹な反響を豫期することができなくなる。』と友人に書き送つてゐる。彼には自然の要求、純粹藝術の創造が何ものよりも尊く、且つそれが運命であつて、世評を顧る餘裕も無かつた。七十九歳の彼は彼のやり上げたこれらの仕事に對して更に總決算をするものの如くに、エツケルマンに語つて『わしの仕事は大衆向にはなれない。そんなことを考へ、さうあらしめようとする者があればそれは間違ひだ。わしの仕事は大衆の爲に書かれたものではなく、わしと同じものを欲し求め同じ方向にある極少數の者の爲に書かれたものだ。』と云つてゐる。

彼が『深き靜寂』のうちに止住して、おちつき切つて生き通したことは三十歳の彼に於ても八十歳の今に於ても同様である。かうした態度を頭に入れて、われらは再び彼の書き遣した言葉に目を向けよう。『詩の内容は、自己の生活の内容である。何人もそれをわれらに與へることはできない。曇らすこと位はできても立ち枯らすことはできない。』……『詩に接することにはわれとわが心になづねるがよい、それが果して體驗せられたもの (ein Erlebnis) を含んでゐるか……』彼が如何に體驗を重んじた詩人であつたかは必ずしも今にして改めて述べる必要はないことであらう。それだけ、彼の立場からすれば、彼の遺産をつぐべきものにこれを繰返さずにはをられなかつた。絶えず自己を見詰め

よ、そして何人も與へること、何人も奪ふことのできないものを自己のうちから掘り起すこと、これに成功するものは、賦與せられた天分に差等があつても、完成せる個人として、全體的相關に缺くことのできない生命の一環を構成すべき役割を與へらるべきものであり、民族の全生命に參與すべきものである。彼はそこに彼の愛好する『促進』を此の『體驗』と結び附ける充分の理由を見出すのである。

ゲーテの死

一八三一年八月二十六日、八十二回目の誕生日を明後日に控へてゐたゲーテは、騒々しい祝賀のお祭を避けてイルメナウに赴いた。翌二十七日、さわやかに晴れた夏の朝、彼は馬車を驅つて、ギツケルハーンの山嶺にさびしく立つてゐる獵舎を訪ねた。五十一年前の九月『街の混乱、人間の哀訴、請求、濟度し難い惑亂を避けるために』數日をこの獵舎に送つたことがひしひしとゲーテの追憶のうちに湧いて來た。明日、その最後の誕生日を迎へようとするこの老詩人は、可なりに高く繁つてゐる草藪をかき分けながら、元氣に、今は見捨てられた様に立つてゐる獵舎に行つた。手を引いて力添へをしようとする伴のものの言葉を笑ひながら拒けて『わしには、これしきの階段が昇れんと思ひますか。まだ大丈夫です。』と可なりにけはしい段ばしごを二階に昇つて行つた。『わしは昔ここで従僕と夏一週間を送つた事がある。その時壁に小さな詩を書いておいた。わしは、それを今一度見たい。』と伴の者にそれを探させた。南側の窓の左側に鉛筆で書かれた文字がまだ鮮やかに讀まれた。

『なべての峰に

やすらひあり

なべての梢に

そよとの風の

ゲーテの死

揺ぐも見えず

林には小鳥黙しつ

しばし待て

やがてはなれも慰はなん。

一七八〇年九月七日、ゲート

『ゲートは、この句を誦んだ、涙は彼の頬を流れた。彼は徐やかにその焦茶色の上著から白いハンカチをだして涙をふいた。そして物静かな沈痛な語調で、「さうだ、しばし待て、やがてはなれも慰はなん。』といつて、暫く沈黙を續けてゐたが、今一度窓から、暗緑の縦の林に見入つて、やがて振り向いて、「さ、もう歸らう。」といつた。』

これは、その時の唯一の同伴者マール氏が書きしるした言葉である。ゲートがこのさびしい部屋に残した涙、深い沈黙の數秒、その胸に來往した思ひが何であつたかは、知る由もないが、彼の口吟んだ『しばし待て、やがてはなれも慰はなん』の詩句こそは、やがて、彼の上に来るべき死に對する前奏曲にもつともふさはしい言葉であつた。

年明けて、一八三二年三月十六日、ゲートは眠られぬ夜が明けて胸部に疼痛を感じた。軽い感冒で

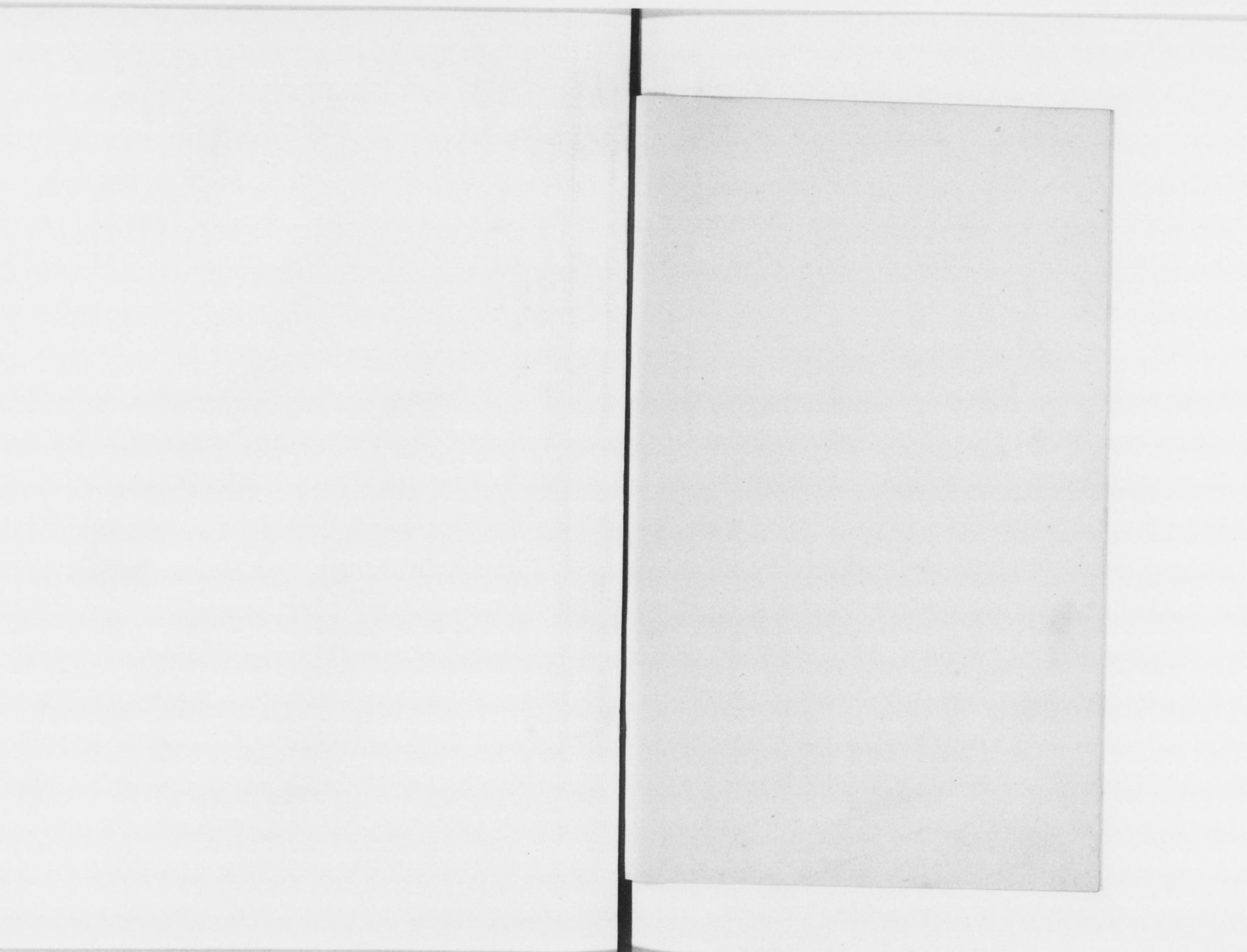
ある。醫者の手當ですぐに気分も好くなり、十七日、十八日、十九日とほとんど平常と變りない状態に復した。殊に十九日の如きは、終日起きてゐて主治醫と極めて快活に談笑し、明日から日常通り、その日課につく事のできるのを喜んだ。然るにその夜から二十日にかけて、容態が急變して、險惡になつて來た。主治醫のフォーゲル君に百年あとから惡口をいふのでは追つかないが、今頃の醫者ならば、これ式の感冒で、患者を取られはしなかつたらう。ゲート自身も、こんな事で死なうとは信じてゐなかつた。二十一日の夜の如きは、秘書のヨーン氏に向つて『辛棒して呉れ、二三日の事だから。』ともらした言葉は、取り様では、お別れもあと二三日の辛棒とも取られるが、ゲートの積りでは、あと二三日で君と仕事が始められるといふ意味であつた。二十日、容態急變の時の患者を醫者はかう書いてゐる。『強度の不安、呻吟、冷汗、極度に早い脈搏、惱ましい渴き。』まことに素人臭い容態書ではある。

が科學的でないだけ、病ゲートの様子が彷彿する。二十一日は病狀の急激なる進退。その小康の合間に、贈られた繪に就て所見を述べたり、從僕に新しい書物の頁を切らせたりした。夜になつて病が漸く進み、意識がしばし不明。十一時頃娘（子息の未亡人）に孫達を寢就かせ彼女にも息む様に命じ、從僕と秘書だけを傍に置いた。從僕には睡くなつたら自分（ゲート）の床に寢る様にいひつけ、自身は終夜ベットの側の安樂椅子によつてゐた。十二時頃、一時間ばかりまどろむ。

二十二日、臨終。朝六時、安樂椅子から身を起して、二三步隣室の書齋の方へ歩いて行く。そこに昨夜自室に歸つたはずの娘が密かに徹夜してゐるのを見つけ「これは、これは、奥さん、もう起きてこられたのですか。」と元氣に親しみある冗談をいつたが、力なく椅子に戻る。九時、ぶどう酒を割つた水を求め、心地よげに飲み干してから、部屋に少し光線をいれる様に命じた。けだし、患者の神經をいたはつて、わざと部屋を暗くしてあつた。それから、けふは何日だときいた。三月二十二日といふ答へを得て「では、もう春が始つた。それだけ回復も早からう。」といつた。やがて娘の手を執つて靜かにまどろむ。色彩論や繪の事が譚言に上つた。「黒い背景の上に、すばらしい色の配合で、描いた黒い卷毛の美しい女の首をご覧。」ともいつた。それから「その繪のはいつてゐる帙を取つて呉れ。」と命じた。そこには帙はなくて、あるものは本だけであつた。その旨が告げられると「では幽霊だつたのか。」といつた。時間を訊いて、十一時といふ答へに朝食を命じた。しかしほとんど食へなかつた。水を求めたけれども、それさへ、もはや充分には飲めない。今一度立上らうとしたが、よろけてすぐ腰を下した。その時ゆかの上に幻像を見たのか「シルレルの手紙をなせそんな所に置くのか。」と訊ねた。それからすぐ從僕に「寢室のよろひ戸を明けて、もつと光をいれてくれ。」と命じた。これが、ゲーテがこの世に残した最後の言葉であつた。

彼の最後の言葉として、意味ありげに傳へられてゐる *Mehr Licht!* の起源である。目の前が暗くなる。好い氣持ちではない。もつと明るくしろ。これだけのことである。今更意味ありげな言葉を残さずには死に切れない男では、わがゲーテではなかつた。

それから、こんこんと睡りに落ちて行つた。そして、右の手を舉げて、中指で空間に、何か三行に、詩の句らしいものを書いた。支へる力が衰へると共に、手は次第に沈んで行つて、最後に、膝の上の布團に幾度もそれを繰返した。そのまま、午前十一時半といふに、安樂椅子にもたれたまま、左側の方にややからだを沈めて、靜かに息を引取つた。まことに安らかな臨終であつた。發病してから丁度一週間目、病狀が昂進してから僅に三日目である。八十三の長い一生であつた。



索引

本項には主要なる、人名・地名・其他を掲示せり。
 掲示の順は羅馬字の「アルファベット」に従ふ。
 日本語はローマ字綴の順による。
 句頭に冠詞あるものは、次の語の頭字により配列せり。

A

- アナレーン
「紀要」 („Annalen“) 144
- „An Schwager Kronos“ 97
- アントニオ (Antonio) 109
- アルベルト (Arbert) 47, 49
- アルノルト (Gottfried Arnold) ..
..... 120
- 「アウエルバッハの窖」 („Auer-
bachskeller“) 17, 58
- アウグスタ・シュトルベルク (Au-
guste Stolberg) 55-56, 57

B

- バゼドウ (Basedow) 52, 128
- Bayle 119
- ベーリシュ (Behrisch)
..... 15, 16, 17, 18, 55
- ビールショウスキー (Bielschow-
ski) 208
- ボイエ (Boie) 7
- 「牧師の手紙」 („Brief des Pa-
stors“) 71-92
- ビオルネ (Börne)
..... 472, 478, 480, 482
- ブレンターノ (Peter Brentano)
..... 49, 52
- 佛教 154-155, 382
- Brucker 119
- バイロン (Byron) 313, 453

C

- カーライル (Carlyle) 453
- 地霊 (Erdgeist) 299-300,
357, 358, 359, 364, 415, 433, 435
- クリスタアーネ (Christiane)
..... 482
- 「クラヴィゴ」 („Clavigo“) .. 35

D

- 大乘佛教 155, 160
- デーモン (Dämon)
..... 32, 53, 54, 104, 126, 127, 161
- 「断片ファウスト」 („Faust, ein
Fragment“) 279, 287-288
- ダルムシュタット (Darmstadt) ..
..... 43, 44, 50, 121
- デカメロン (Decamerone) 15
- „Denkmal der Schrift des
Herrn Jacobi“ 145
- デカルト (Descartes) 135
- ディルタイ (Dilthey)
..... 125, 140, 384
- 「獨逸建築藝術に就て」 („Von
deutscher Baukunst“) .. 448
- 獨逸國語促進協會 (Gesellschaft
zur Ausbildung der deut-
schen Sprache) 27
- 「獨逸の様式と藝術」 („Von deut-
scher Art und Kunst“) ..

.....27
ドクトル・メッツ (Dr. Metz) ..20
「童話」 („Märchen“)241
Düntzer341

E

エッケルマン (Eckermann)
.....95,280,286,
289,290,291,317,321,322,337,
406,424,444,456,458,463,483
エドゥアルト (Eduard)103
「エグモント」 („Egmont“)
.....59,481
エグモント (Egmont)59
「永遠のユダヤ人」 (Der ewige
Jude“)74
エルザス (Elsass)
.....23,24,29,30,31,34
Entsagung の思想127-128,
161-162,176,190,194-195,224
「エフェメリーデス」 („Ephemerides“)
.....119
Erasmus Francisci82
Erich Schmidt371
「エチカ」 („Ethica“)51,
117,118,122,125,137,139,145
オイフォリオン (Euphorion)
.....313

F

「ファウスト」 („Faust“)17,26,
30,58,109,111-113,154,156,
169,170,171,239,240,241,264,
265,271,274,275,279-318,321-
425,429-444,448,453,466,476
「ファウスト」の「パラリポメナ」
 („Paralipomena zu Faust“)
.....97
ファウスト (Faust)12,21,
66,67,109,111-113,161,163,
241,242,260-264,265,292-293,

296-305,306-317,321,325-333,
334,335,339-345,347-350,352,
356-370,371-374,377-378,379,
380,381,383,384,389,390,392,
400,402-403,405,408,409,415,
416,417-420,422,425,429-444
フェリックス (Felix)184
フラックスラント嬢 (Karoline
Flachsland)44
フランクフルト (Frankfurt am
Main)3,5,6,8,10,12,22,
41,42,43,44,47,50,52,53,55,
57,58,59,63,76,127,252,279
「フランクフルト學藝評論」
 („Frankfurter Gelehrte
Anzeigen“)44,86
フランス文學27,453,454
フランス革命198,
271-272,273,458,465,477,479
「フランス出征記」 („Chmpagne
in Frankreich“)409,410
フリデリーケ・ブリオン (Friede-
rike Brion)
.....28,29-35,53,54,351

G

「ガニメート」 („Ganymed“)
.....97,100-101,105-
106,159,354,355-356,361
ガニメート (Ganymed)
.....100-101,105-
106,107,108,113,163,259,316,
356,357,358,360,374,385,424
„Die Geheimnisse“275
「劇場覺書」 („Anmerkungen
übers Theater“)27
「言語起原論」 („Über den Ur-
sprung der Sprache“)39
ゲーニウス (Genius)53,60,104
Gerhardt125
ギッケルハーン (Gickelhahn)
.....437

リギシヤ
.....157,310,311,312,321,420,456
ゲーテの父 (Johann Kaspar
Goethe)
.....10,12-13,20,23-24,41,75
ゲーテの母 (Katharina Elisabeth
Goethe)10,12,20,21
ゲーテの妹 (Cornelia Goethe) ..
.....13,14-15,49
ゲーテの祖父 (母方の) (Johann
Wolfgang Textor)10
「五月の歌」 („Mailied“)
.....31,64,97
「ゴッツ・フォン・ベルリヒンゲン」
 (Götz von Berlichingen“)
.....5,35,43,51,64,473,474,481
ゴッツ (Gätz)65,109
ゲーツェ (Göze)474
グレートヘン (「ファウスト」の
Gretchen, Margarete)
.....30,31,35,109,303-305,309,
313,316,437,439,440,441-442
「グレートヘンの悲劇」
.....65-66,240,303-305
グレートヘン (Gretchen)
.....13,35,368
„Der Gross-Cophita“271

H

Hafis153
「母の場」 („Die Mütterszene“)
.....321-425
ハウプトマン (Hauptmann) ..109
Haym134
ハイデルベルク (Heidelberg) ..59
ハイネ (Heine)
.....189,472,478,480,482
Heinrich158,406
ハインゼ (Heinze)7
ヘレナ (Helena)280,308-314,
321,322,325,331,333,351,373,
374,402,403,416,417-420,422
ヘルデル (Herder)17,

27,28,29,36-40,43,44,57,76,
118,133-136,137,138,141,142,
153,171,257,351,419,481,482
ヘーリング (Hering)131
„Hermann und Dorothea“
.....271
Hohlfeld341
ホメール (Homer)456
ホムンクルス (Homunculus)
.....241-243,311-312
ヘップネル (Höpfner)120,121
ユーゴー (Hugo)453
フンボルト (Wilhelm v. Hum-
boldt)284

I

Idee350,374-375,390,391-
404,419,420,421,422,423,424
「イルメナウ」 („Ilmenau“) ..243
イルメナウ (Ilmenau)487
インド156
イフィゲーニエ (Iphigenie) ..109
伊太利58,251,
257,266,351,352,370,395,419

J

ヤコビ (Jacobi)
——ゲオルク (Georg) ..52,129
——フリッツ (Fritz, Friedrich)
.....52,73,125,128-135,136,137,
138,139,140,143,144-146,256
イエナ (Jena)395
イエルーザレム (Karl Wilhelm
Jerusalem)50,475
Johan Köhler120
ジョン (John)489
儒教159
ユング・シュタイリング (Jung-Stil-
ling)7
純粹379-380
純粹直觀375-383
純粹現象、根本現象 (das reine

Phänomen, Urphänomen)
..... 390,404-416

K

カッバラ (Kabbala) 384
「花崗岩に就て」 („Über den Granit") 408-409
神 13, 19, 65, 72,
78-86, 86-92, 101, 103, 112, 124,
129-130, 134, 135-136, 136-137,
138, 140, 142, 143, 144, 146, 147,
151, 152, 185, 186, 209, 227-228,
252-254, 255, 258, 261, 263, 267,
293-297, 347, 349, 352-356, 364,
379, 391, 392, 432-434, 436-444
寛容 77-78, 84-86
感傷主義 44
カント (Kant) 146, 393-394
カルルスバード (Karlsbad) 323
ケートヘン (アンネッタ) (Kätchen, Annette) 15-16, 35, 53, 55
「華嚴經」 382
「経験と科学」 („Erfahrung und Wissenschaft") 404
啓蒙哲学 393
ケストネル (Kestner)
..... 46, 47, 48, 50, 72, 121, 475
基督 82, 83, 137, 237, 365
基督教 72,
129, 185, 186, 209, 210, 230, 360
クレールヘン (Klärchen) 481
クレッチンベルグ嬢 (Susanna v. Klettenberg) 21-22, 76
クリンゲル (Klinger) 8
クロップシュトック (Klopstock)
..... 193, 454, 474, 477
クネーベル (Knebel)
..... 8, 137, 145, 146, 254
「古代ワルブルギスの夜」 („Klassische Walpurgisnacht")
..... 312
「湖上吟」 („Auf dem See")

..... 64, 97
國民文學 449-456, 465-467
ケルン (Köln) 52, 129
「考慮と忍従」 („Bedenken und Ergebung") 392, 397, 404
孔子 159-160
「共犯者」 („Die Mittschuldigen") 22
「教育國」 („Die pädagogische Provinz")
178, 184-188, 206-211, 219-232
「教會・異端正史」 (Unparteiische Kirchen- und Ketzehistorie") 120

L

ランゲル (Langer) 19, 21, 76
「ラオコーン」 („Laokoon")
..... 171
ラ・ロッシュ夫人 (Marie Sophie v. La Roche) 22, 48
ラファートル (Lavater)
..... 3, 8, 52, 72,
73, 128, 136, 137, 138, 247, 345
レーマン (Lehmann) 255
ライブニッツ (Leibniz) 134, 135
ライプツィヒ (Leipzig)
..... 6, 12, 13, 14,
15, 17, 18, 21, 22, 23, 24, 25, 41,
55, 63, 75, 123, 241, 351, 352, 474
レンツ (Lenz) 27, 28
レッシング (Lessing) 85,
131-133, 137, 171, 454, 474, 475
リライ・シェーネマン (Lili Schöne-
mann) 53-59
リムプレヒト (Limprecht)
..... 21, 24, 76
リンネ (Linné) 117, 146
リサボン (Lissabon) 13, 75
ロープシュタイン (Lobstein) 36
ローペル (Loeper) 74
ロッテ・ブッフ (Charlotte Buff)
..... 46-48, 50, 59, 120, 121, 351

ロッテ(「ウエルテル」中の) (Lotte)
 46,49,475
 ルーデン (Heinrich Luden)
 287,288,289,290,291
 ルチフェル (Luzifer)
 252, 253,266,352-353,363,364

M

「マホメット」 („Mahomet“) ..65
 マホメット (Mahomet)
 107,151,152,153,163,164
 マホメット歌160
 「マホメットの歌」 („Mahomets
 Gesang“)
 91,106-108,111,262
 マール (Mahr)488
 「魔女の厨」 („Hexenküche“)
303
 マンツォーニ (Manzoni) ...453
 マリアンネ・フォン・ウィレマー
 (Marianne v. Willemer) ..
 145,153
 マックス・モリス (Max Morris)
5
 „Maximen und Reflexionen“ ..
271,272
 マクシミリアーネ (Maximiliane)
 48-50,51,52
 メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn)131-132,133
 メフィストーフエレス (Mephistopheles)44,66,
 113,154,258,261,294-297,301-
 303,305,308,309,310,311,312,
 314,315,316,321,322,325-333,
 339,340,341,342,343,347-350,
 360,363-364,365,366,368,374,
 380,381,418,430-434,441,443
 メルク (Merck)
 43-44,50,52,120,121
 「メッサス」 („Messias“)454
 マイヤー (R. M. Meyer)449

民謡40
 モンターン (Montan)
 176,177,215
 「迎へと別れ」 („Willkommen
 und Abschied.")31,64
 ミュレル宰相 (Friedrich v. Mü-
 ler)411,416
 ミュンステル (Münster)25,34

N

ナポレオン (Napoleon) ..154,465
 ナタリエ (Natalie)22
 「ナータン」 („Nathan der Weise")
85
 „Natürliche Tochter"271
 „Neue Liebe neues Leben" ..97
 „Der neupolierte Geschichts-
 Sitten-Spiegel"382
 ノストラダムス (Nostradamus)
293

O

オーレンシュレーゲル (Oehlen-
 schläger)453
 エーゼル (Oeser)15,18
 オッフエンバッハ (Offenbach) ..57

P

パンテイスムス (Panteismus) ..
86
 パリス (Paris)
311,321,322,325,331,403
 ペルシャ153,156
 ペーターゼン (Petersen)391
 プルタルヒ (Plutarch)
322,323-325,388,389,400
 「プロメートイス」 („Prometheus")
 (風詩)
97,98-100,103-105,106,
 132,136,139,259,354-355,438
 「プロメートイス」 („Promethe-
 us") (劇詩)

.....65,74,104,434
 プロメーテウス (Prometheus) ..
 98-100,
 101;103-105,106,113,151,152,
 163,164,235,236,354,356,357,
 358,359,360,374,385,424,434

R

蓮如上人113
 リチャードソン (Richardson).....
15
 リーメル (Riemer)
323,325,337
 リースベック (Riesbeck)7
 ローマ456
 浪漫派153,155,482

S

「西東詩篇」 („Westöstlicher
 Divan")145,154,162,163,259,447
 「サクンタラ」156
 ザルツマン (Salzmann)
17,27,32,42
 「ザティロス」 („Satyros")74
 シェリング (Schelling)
144,145,146
 シュレル (Schiller)
198,280,292,367,382,
 *394-397,398,477,481-482,490
 ショーペンハウエル (Schopenhau-
 er)154
 聖ヨゼフ二世 (Sankt Joseph
 der Zweite)
174-175,177,178,179,200,202
 聖書76,79,80,123,125,163
 世界文學447-460,463-467
 ゴーゼンハイム (Sesenheim)
28,30,31,35
 シャフトスマリー (Shaftesbury).....
134
 沙翁 (Shakespeare)

.....18,27-28,40,117,118,119,146
 「四季」 („Vierjahreszeiten") ..266
 「市民將軍」 („Bürgergeneral") ..
271,272
 支那156,159,382,463,464,465
 新人本主義197
 親鸞83
 「神諭」 („Gott")134
 「新詩集」 („Neue Lieder")63
 「親和力」 („Die Wahlverwandt-
 schaften")95,109,240
 「詩と眞實」 („Dichtung und
 Wahrheit") ..
3,19,25,27,39,50,60,
 62,71,72,73,74,75,76,97,117,
 126,127,128,145,252,352,371
 自然24,29,31,45,46,
 126,307,344,351,361,367,375,
 376,383-391,391-392,395,398,
 401,407-416,419,422,423,463
 「自然に関する断片」 (「自然頌」
 („Fragment über die Na-
 tur")
384-390,395-401,411,415,422
 象徴とアレゴリー421
 「植物學研究の歴史」 („Geschichte
 meines botanischen Stu-
 diums")117
 「植物變態解釋の試み」 („Ver-
 such, die Metamorphose der
 Pflanzen zu erklären") ..
399
 「植物の變態」 („Metamorphose
 der Pflanzen")399
 職業教育206-208,223-226
 宗教 ..19,71-92,159-160,184-187,
 208-211,226-230,267,436-440
 ソフォクレス (Sophokles)40
 スピノーザ (Spinoza)51,52,
 73,117-147,158,161,162,380
 「スピノーザ論」 („Studie nach
 Spinoza")139-142

シュタイン夫人 (Charlotte v.
 Stein)137,138,139,140,
 251,257,259,266,380,481,482
 シュタイネル (Rudolf Steiner) ..
341,342,384
 シュトルベルク (Stolberg) 伯兄弟
55,57,58
 シュトラースブルク (Strassburg)
 7,17,18,23,24,25,27,28,30,34,
 36,41,42,63,64,76,96,119,351
 シュトリヒ (Strich)454-455
 シュトルム・ウント・ドラング
 (Sturm und Drang)5,
 8,11,18,40,60,64,96,129,153
 ズライカ (Suleika) ..145,153,162
 ズーフアン (Suphan)132,140

T

「旅人の嵐の歌」 („Wanderers
 Sturmlied")43,60,64,97
 「旅日記」 („Journal meiner Reise
 im Sommer 1769")39
 Tadler384
 「歌鳥鈔」83
 タッソー (Tasso)109,275
 タールハイメル (Thalheimer) ..
131
 トーマス・マン (Thomas Mann)
189
 「天上の序曲」 („Prolog im Him-
 mel")
292-297,369-370,433,434
 東洋と西洋157
 トラップ (Trapp)89

U

「ウルファウスト」 („Urfaust") ..
5,35,65-67,74,279,368,369
 「美しき魂の告白」 („Bekent-
 nisse einer schönen Seele")
198
 „Urworte Orphisch"249

V

フォーゲル (Carl Vogel)489
 ヴォルテール (Voltaire)454
 „Von den göttlichen Dingen"
144

W

ワーグネル (「ファウスト」中の)
 (Wagner)241-243,
 261,311,362,364,365,372,417
 ワーグネル (Heinrich Leopold
 Wagner)28
 ワール (Georg Moritz Wahl) ..
341-342
 「若きウェルテルの悩み」 („Leiden
 des jungen Werthers")
5,7,46,47,48,49,50,52,
 55,64,74,95,120,121,239,240,
 368,379,466,473-475,476,481
 「鷹と鳩」 (Adler und Taube") ..
45-97
 ワイマル (Weimar)
3,4,5,6,8,10,53,59,137,196,
 256,279,331,384,453,481,482
 ウェルテル (Werther)
12,45,46,47,65,
 109,136,172,182,343,351,372
 ウェッツラー (Wetzlar)44,
 45,46,47,48,50,123,127,351
 ワイラント (Weyland)29,30
 ウィーラント (Wieland) ..18,482
 ウィルヘルム (Wilhelm Meister)
21,109,
 171-172,176,184,196,198-199,
 215,216,223,226,248,264-265
 「ウィルヘルム・マイスターの修業
 時代」 („Wilhelm Meisters
 Lehrjahre")21,
 109,122,169,171-172,174,181,
 196-197,197-199,200,239,245,
 248,264,308,448,451,466,482

「ウィルヘルム・マイステルの遍歴 時代」 („Wilhelm Meisters Wanderjahre“)109,159,160,170,171,172- 190,193-216,219-232,239,264- 267,308,448,466,476,478,482	ウィンケルマン (Winckelmann)18 ウィトコフスキー (Witkowski)341
Z	
「ウィンケルマン」 („Winckel- mann“)402	ツァウペル (Zauper)173,193 ツェルテル (Zelter)117,284

昭和十三年十二月七日印刷
昭和十三年十二月十二日發行



發行所

東京神田區西
區三丁目二
番地
電話二〇〇九
番
東京神田區
區三丁目二
番地
電話二〇〇九
番

弘文堂書房

著者
木村
謹治

印刷者
八坂淺太郎

東京神田區
區三丁目二
番地
電話二〇〇九
番

定價金參圓

外地定價金參圓參拾錢

弘文堂印刷部

木村謙治著 若きゲーテ 價二・八〇 税・二二

木村博士の「若きゲーテ」が、我國のゲーテ研究の最高峰の金字塔であることは今更贅言するに及ばない。そこには、あらゆる葛と怨を身一つに味はんとした若きゲーテの逞しき成長の姿が、それにふさわしく廣汎なる角度から分析されてある。またそこには後年の政治的・社会的共同體に對するすなはなる關心も現はれてある。ゲーテはドイツの、世界の心臓である。歐洲大戦に際してドイツの兵士の背義にはファウストが收められてゐたと云ふ。新なる東洋の原理には、ゲーテとの深き親近さがある。最も東洋的な詩人はゲーテであつたのである。いま茲に、この豪華にして且つ極めて廉價なる八百頁に近き改訂版を世に送るのは、この好著が一人にでも多く、世の若き人々の手に渡り得んが爲に他ならない。今や日歐文化協定成立の秋、幸にこの微意を誦とせられて本書を編みかたれんことを。

(1)

田邊元 監修 西哲叢書

各 四六版クロス
平均三三〇頁
定價一圓三十錢
送料十錢

ソクテス	後藤孝徳	ヒム	土井虎賢
ララテス	長瀬信徳	ルソ	島芳夫
アウグスティヌス	松村克己	フンケル	井島龍
デッカス	野田又夫	シエリヒ	木村崇
ホッブズ	藤松俊明	フエン	野田守一
スピノザ	藤松俊明	シエリヒ	泉井久之助
ラッセル	下村寅太郎	シムエル	高井久三
メイヌード・ピラ	藤松俊明	ヘン	高井久三
マクス・シェーラー	藤松俊明	フツ	下村寅太郎
アリストテレス	高田三郎	ショーペンハウエル	龍野健次郎
プロテノス	龍野健次郎	フワイエル	伊藤四郎
トマス・アクィナス	服部英次郎	ニール	松岡義和
レッシン	中井正一	デイル	石田義和
カント	高坂正一	コル	佐藤三
カケ	橋本明	ベス	西谷三
キエ	橋本明	マクス・ウエーバー	白井二

(2)

弘文堂刊行書

植田謙蔵著	山内傳立著	藤原理作著	恒藤 恭著	戸田貞三著	戸田貞三著	戸田貞三著	戸田貞三著	新明正道著	藤波敏吉著	松本潤一郎著	松本潤一郎著	松本潤一郎著	松本潤一郎著	河田 誠著	土屋 謙著	中川 善之助著	服部之助著	野上俊夫著	佐藤昌彦著	
藝術史の課題	體系と文化現象	法的価値と理論	社會學講義案(第一部)	社會學講義案(第二部)	社會學の構成	社會學要義	社會學及原論	社會學階級	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理	社會學原理
二〇〇・三三	三〇〇・三三	二五〇・三三	二〇〇・三三	一三〇・一四	二五〇・一四	四〇〇・三三	二八〇・三三	二八〇・三三	二八〇・三三	一八〇・一四	一八〇・一四	一八〇・一四	一八〇・一四	三三〇・三三	三三〇・三三	三三〇・三三	三三〇・三三	一五〇・一四	一五〇・一四	一五〇・一四

(3)

弘文堂刊行書

田村 徳治著	岡本 春彦著	木村 隆治著	木村 隆治著	紀平正美著	石田 憲次著	石田 憲次著	石田 憲次著	石田 憲次著	石田 憲次著	石田 憲次著	津田 青楓著	津田 青楓著	内山貞三郎著	内山貞三郎著	泉井・高谷共著
法律學の價值に關する懷疑	哲人ゲブルノ	若きゲブルノ	知と	バーナード・ショウ眞體	カイライル・過去と現在	ミル	カスミン・此の最後の者にも	驚筆隨筆	青風隨筆	畫家の生活日記	中國漫遊詩研究	英國漫遊詩研究	英國漫遊詩研究	英國漫遊詩研究	英國漫遊詩研究
一五〇・一四	一三〇・一四	二八〇・三三	三〇〇・三三	三〇〇・三三	二五〇・一四	二五〇・一四	二五〇・一四	一五〇・一四	二八〇・一四	二八〇・一四	二五〇・一四	二五〇・一四	二五〇・一四	二五〇・一四	二五〇・一四

(4)

940.28

Kz.39

3

終